
男姫さまっ！ 花嫁修業日記

+

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男姫さまっ！ 花嫁修業日記

【Nコード】

N2761T

【作者名】

+

【あらすじ】

2222年 現在、世界は電波時代。

あらゆる物が機械化となり、世界が変わっていきました。

電波時代の中、ごく普通に育っていった少年、安曇野海斗は今年で高校一年生。ちょっと中性的な顔立ちと身長で女の子に間違えられる海斗だが、その他には何事もなく、平凡な毎日を送っていた。

そんなある日、海斗は兄、空地の部屋の機械を誤って触ってしまった……？

異世界ファンタジー・男姫さまっ！ 花嫁修業編始まり始まり

⋮

プロローグ（前書き）

初めての作品なので、不慣れで変な事になるやもしれませんが、
どうぞ、ごゆるりとお楽しみ頂けると嬉しいです。

プロローグ

2150年

世界は大きく変わりました。

世界のあらゆる物が機械化し、人は便利な世の中を造り上げました。人類の生き方が変わったのです。

そこで人間は、持ち前の順応性を発揮しました。

主にデータを使うこの時代、金銭も物資も：時には人間関係さえも、通信でやり取りされます。

何か買いたければ、手持ちのアクセス機械で操作し、数分後には転送機で手元に届きます。

自宅に数十台機械があるのは当たり前。とある家庭では、自宅そのものが機械化している世の中。

皆、機械に依存し、機械無しでは生きてはいけない…そんな現実リアルが続き、数十年過ぎていったある年。

2222年

現在、世界は電波時代。

闇の中で

コーン…コーン…コーン…

何処からともなく、石を打ったような音が聞こえた。それは鈍く、石造りの壁に反響して、一定のリズム感で鳴り響いていた。石造りの回廊が続いているこの場所は、薄暗く、間隔をあけて灯っているロウソクの光が、仄かに廊下を照らしていた。

回廊を進んでいくと、一つの部屋にたどり着く。謎の音の原因はここにあった。

部屋は大人が約30人は入れるだろうか、そんな部屋の中には、異様としか言い表せないような光景が広がっていた。

大小様々な人影があり、その影は、中央の一本のロウソクと、その横にいた一つの人影を囲むように輪になって並んでいた。

床には白い粉で幾何学的な模様が描かれていた。人影の大きさはバラバラだが、人影には一つの共通点があった。

それは、皆頭から足先までをスッポリ覆い隠すような真っ赤な、深紅のマントを着ている事だ。

そんな姿で円を作り、じっと静かに佇んでいた。それはまるで何かの儀式をしているようだ。

すると、中央にいた人影が動き、石畳の上に座った。マントから唯一見えていた口から、よく通る声で朗々と喋りだした。

「時は満ちました」

その人影はスツと手を出し、持っていたモノをゆっくり石畳の上に置いた。

「我々は彼の貴き儂い者を、取り戻さなければいけません」

そのモノは、人の頭蓋骨の様に見えて、異質な不陰気を漂わせた。影はもう一つの手を出し、持っていた棒状のものでそのモノを叩き始めた。

コーン…コーン…コーン…

謎の音の原因はこれだった。一定に鳴り響くこの音は、何故か心を不安にさせるようだった。

「…さあ、始めようじゃないか」

その言葉と共に、輪になっていた影達が、聞き取りにくい声で一斉に唱え始めた。

『…我々……儂き……美…い……姫…』

「さあ！目覚めの時よー！」

『目覚めの時よー！』

「第七章、囚われ詞…召喚魔術」

人影はひっそり嗤った。

その瞬間、部屋は深紅の光に包まれた。

不気味な笑い声を響かせながら…。

第1章 異世界へ

2222年

世界は電波時代

ピピピピ...

晴天の青空。

夜が明け、朝日が昇った空の下。空と同じ真っ青な屋根の家から、目覚ましのアラーム音が聞こえた。

「ん…うん…？」

時計が目を覚まさせるはずの人物が、ベッドの上で身を這いながらアラームを止めた。

そうして数分。

「……………ZZZ…」

目覚まし時計の意味がなくなった。

コンコン

そこで、現在寝ている人物の部屋の扉が叩かれた。

「海斗かいと?もう起床の時間は過ぎているぞ。起きろ」

そう言っ部屋へ入ってきたのは、きつちりと短く切られた黒髪と緑色のメガネが特徴のいかにも生真面目そうな青年だった。

青年はずかすかと部屋の主の了解も得ずに入ってくる。そして、

ベットのすぐそばまで来ると、遠慮無しに部屋の主から布団をもぎ取った。

「……………んー…」

「起きろと言っているだろう！ ……全く、学校に遅刻してもいいのか？」

「……………？ がっこー？ …… がっこー……………」

そこで咳きが一時止まり…

『……………学校…！！！？』

そう叫んで起き上がったのは、茶色掛かった黒髪で中性的な顔立ち、大きな瞳が特徴の可愛い少年だった。

「やべやべっやばいつー！」

この多少口が悪い少年…安曇野 海斗は慌ててベットから降り、クローゼットに掛けてあった制服に急いで着替えだした。

「…ふう…全く、高校生にもなつて1人で起きられないとは…情けないぞ」

「りっ、陸也兄さんっ」

高校生には見えない可愛い顔を歪めながら、涙目で訴えた。

青年…安曇野 陸也はそんな弟に呆れながら言った。

「…全く…朝食の準備は出来てる。俺はもう出るからな」

「！…さんきゅー！」

そんな甘い兄からの言葉を、海斗は蔓延の笑みで受けとめた。

(急がなくちゃ…！)

バタバタと支度をし、兄、陸也が作ってくれた朝食を食べ、自宅を出た。

オレの三つ上の陸也兄さんは今、大学二年生だ。真面目で、いつも朝が遅いオレの分の朝食を作ってくれる。

これじゃいけないと思って、起きようと頑張っているんだけど、やっぱり起きれなくていつも世話になっている。

しかし朝食以外の家事は海斗がやっていて、16歳になって、趣味が料理と洗濯、掃除になっているほどだ。

…と、こうして回想しているうちに、学校手前の道まで着いていた。

家の外には、機械がはびこっている。数歩歩くとお掃除ロボ（オレが勝手に名付けた）やら、売店ロボやらが動いている。

この世は電波時代。物理的な事はオレには分かんないけど、これらの物は、電波で動くらしい。

電波っていうと、昔は通信とかに使われて、情報を提供する電磁波らしかったけど、今は違う。

…違うというか、根本的な事は同じ何だけど、でもやっぱり違って…って、あー！やっぱりオレには説明とか無理！…こういう時は…

「あ、おはようさん。海斗」

「はよっ！茶衣！」

「？…朝から元気やな…何かあったん？」

「そうか？普通通りだぜ」

そんないつもの会話をして、見るからに胡散臭いような目付きをしているこいつは、神奈沢 茶衣。自称、関西弁のイケメンを豪語している、東京都出身のナルシストだ。

（まあ、顔は悪く無いんだけどな…）

中身が微妙なのだ。

…まあ、取り敢えず、ナイスタイミングで現れたこいつに聞いておくとしよう。

「なあ、茶衣。昔の電波と今の電波の違いって、何だ？」
「はあ？…そんな小学生みたいな馬鹿な質問…わしに聞いとるんか？」
「ばっ…バカつてなんだ！オレは立派な高校生だっ！」
「…はあ…せやな…海斗ちゃんは立派な高校生でちたなー」
「！？…てめー…ケンカ売ってんのか？」
「そないな！剣道部の新星に喧嘩売るなんて、そないなこと、ちーとも考えて無いわ」

茶衣が言っている通り、オレは小学生から剣道を習っていて、中学、高校に入っても剣道を続けている。剣道の昔からの日本の伝統的な所が好きなのだ。

でも、そんな事をニコニコ話されても説得力がない。

「…まあ、こんな小さな子に喧嘩何か売れへんしなー」

そう小声で言われている事に、海斗は気付かない。

「…で、何でもいいから早く答えてくれよ」

「ああ、そうやったな。仕方ないから、この天才美少年が教えてやるるか」

「……………」

もの凄く言い返したいが、ここで言い返すとまた話が逸れそうなので、我慢した。

そんな海斗を内心笑いながら茶衣は答えた。

「電波つて言うんは、主として通信に使われる、周波数10キロヘルツから300万メガヘルツ程度までの電磁波なんやけど、」

「…っ…ちよつと待ってくれ…」

「…何や？」

「…いや…難しい話は飛ばしてくれ。分かんないから」

「…ん、まあ、取り敢えず、昔は通信とかに使われとったんやけど、

今じゃ、物理的にも使えるようになった、って話し」

「物理的に？」

「目にも見えへんし、触れもせんモノが自主的に動いて、世の中を
行き来してるんは怖いと思わへん？」

「？思わないけど？」

「…お前はな。昔の人は、皆普通に使ってるモノが怖くなってきて
ん。そんで、常に目に見えるようにしたんや」

「？…電波なんて今も見えないじゃん」

「それを見えるように開発した装置があんねん。常にな」

「へー…でさ、結局違いつて何なんだ？」

「…だから、昔は通信とかしか出来ひんかった電波が、今じゃ転送
装置とか、物質を扱えるようだったって事やないか？」

「…うーん…分かった」

「！理解してくれたんか！」

「いや。自分には到底分からない事だったんだなー、って事が分か
った」

「……………」

結局、海斗には理解が出来なかった。

キーンコーンカーンコーン…

そこでバツトタイミングでチャイムが鳴った。

これは昔と変わらない、お決まりの…

「「ヤバイ！！遅刻ひだ・や〜！！！！」」

そう叫んで、二人は教室へ走っていった。

第1章 異世界へ 日常

平凡な毎日。

安曇野 海斗の日常を表したらピッタリ当てはまる言葉である。

「ふわああ……暇だ……」

午前中の4限目。これ以上の退屈で腹が減る時間はないように
思える。…まあ、個人差はあるが。

朝、茶衣と二人でチャイムが鳴り終わるギリギリに教室へ着いたが、絶対に担任がいると決め込んで、勢いよく謝罪しながら入った。

しかし、予想してたのを裏腹に、まだ担任は来ていなかった。
なんでも職員会議が長引いたとかなんとか。

結果として、教室中に笑いの渦が巻き起こり、オレ達二人はと
っても恥ずかしい立場に立たされたのだが、それはもういいのだ。
過ぎ去った事だから。

今、現状として深刻なのは、オレの腹ペコ事情だ。

教卓 床からメートルくらい浮いてる台 には、歴史担当の担
任、森丘（あだ名・森ティー）が国の歴史を長々と語っていた。ち
よこちよこ、自身の感想付きで。

腹減った腹減ったー…そう小声で言いながら、目の前の席の茶
衣に八つ当たりをする。

『なあー茶衣。何か食い物持ってねー？』

そう小声で聞いてみる。

『…さっきからうるさいなー』

茶衣は頭だけ振り返って、こちらも小声で答えた。

『そんな物乞いみたいな事せんでも、自分の弁当あるやる？毎日、お兄さんが作ってくれる愛妻弁当が！』

『愛妻…？愛兄の間違いじゃないか？』

『どつちでもええわっ！そんなことっ！』

『いや、どつちでも良くねーだろ……まあ、今日はさ、何故かしんないけど、陸也兄さん、弁当作ってくれなかったみたいで…オレも今朝、作る暇なかったし…だから弁当ねーんだよ』

『…等々、お兄さん愛想尽かしちまったんやな…』

『？』

『…いや、いいんや…仕方ないからこれやるわ』

と、チ○ルチヨコレートを数個オレにくれた。

『お！サンキューー！』

そう言つてオレはもぐもぐチロ○チヨコを食った。○ロルチヨコは昔ながらの小さなチヨコだ。とは言つても、この数十年で徐々に味も形も変化したらしい。オレはこの味で幼少時代を過ごしたから、変わったたといつても何処が変わったのか分からないけど。

『そうゆー素直なところは可愛らしいんやけどな…』

『もぐもぐ……ん？』

『いんや？何でもあらへんで』

『そうか。もぐもぐ…』

その日の午後。

午前中だけ授業があつて、下校となつた。

なんでも今朝の会議はそのことについてだったらしい。

どんな事があつたにせよ、早く帰れるとは嬉しいものだ。

「さて、帰るかな」

オレはバッグを持ちながらそう言っつて、いそいそと教室から出ようとした。

そこで、そんなオレを目にしたクラスメイトの竹下がオレに話しかけてきた。

「海斗、もう帰るのか？せつかくの午前授業なんだから、一緒に遊びに行こうぜ」

「ああー…ごめん。オレ、パス。その…これから用事があったさ…」

「用事？」

そう言っつて苦笑いしていると、竹下が問い返してきた。

「…その…えつと…」

「海斗は家の家事せなあかんのやねんな？」

言葉を濁していると、聞きつけた茶衣が助け船を出してくれた。

「家事…？」

竹下は疑問符を浮かべる。

「こいつんち、両親が共働きしてて、海斗が家の大体の家事しとるんや」

「…そうなのか！…大変だな…」

竹下は、心配そうに言った。

「…っい、いや、言うほど大変つて訳じゃ…兄さんも手伝ってくれらるし…」

「…そうか。でも、大変だろうけど、頑張れよ！じゃあな！」

そう言っつて、竹下は他の奴らと行ってしまった。

その後、オレ達も自宅へ帰るために学校を出た。

「…何か罪悪感が…」

「仕方ないやろ？ああ言わなしつこく誘われて、理由問いただされ

るとこやったんやで？」

「…うーん…そうだな…」

それは困る。

今日、早く帰りたかったのは、家事の他にも用事があつたからだ。でもそれは、他のクラスメイトに言える様な用事の内容ではない。

「まあ、家事しとるんのは間違いやないんやし、別にええやろ」

そうマイペースな茶衣。

「…しつかし…今日はアレ、なんやな…」

「…ああ…アレ、なんだよ…」

「…お前も大変やな…」

「…ああ…そうだな…」

気になるアレ、を言うには、うちの家族を紹介しなければなら
ないだろう。

うちは6人家族で、両親は2人共、単身赴任中だ。父はアメリカ、母はヨーロッパに行っているらしい。

らしい。とは、両親2人の赴任先は毎回変わる。3ヶ月、その場所にいた事はないくらいだ。

アメリカに行っていると思えばアメリカに。オーストラリアに行つたかと思えばヨーロッパに。

それくらい変わるので、毎回覚えるのが面倒で今は大体の場所が分かつたらそれでいいのだ。

それで、朝にも紹介したオレの3つ上の兄、陸也は安曇野家の次男。

オレの下に4つ違いの妹がいて、現在9歳、小学3年生の長女、

天花^{てんか}。この子は本当に可愛くて、まるで天使みたいな子だとオレは
思う。

…そして、一番上の兄。長男、安曇野^{あずま} 空地^{くうち}。

この人が今日の厄介人物なのだ。

第1章 異世界へ 友情

安曇野^{あづま} 空地^{くんでい}は安曇野家の長男。現在25歳で、オレより9つも年上だ。

空地兄さんはいつも家にいて、自分の部屋で過ごしている。そこまでただの引きこもりだが、ちゃんと自室で仕事をしているのだ。

会社でもらったシナリオに基づいて、ゲーム製作をする、所謂ゲームクリエイターだ。

空地兄さんの部屋は変わっている。どう変わっているかというと、部屋に5台ものコンピュータシステムがある。普通、家庭に1台はあれば便利がいいとされる、パイナップル社が発明した最新型コンピュータシステムだ。

空地兄さん曰く、機能的抜群。滑らかな質感。軽やかなフットワークを実現させられる、最高の電波コンピュータ……らしい。

オレにはさっぱり分からない。でも、そんなちょーハイテクな機械がうちに5台もあることは、異常。というのはオレにも分かった。

本人は否定しているが、

そう、うちの長男は異常なのだ。

キツカケは空地兄さんが中学2年生の時だったらしい。

当日13歳だった兄さんは、時間が余ったら秋葉原に行き、ゲームを買い漁り（時には好きなアニメのフィギュアも）、それをプレイして充実な毎日を送っていたらしい。

しかし、ある日いつものように秋葉でゲームを物色していた時のことだった。兄さんは、すれ違いであるゲームを発見してしまっ

てさ……」

「片付けたらええやん」

「それが…勝手に片付けたら、怒りはしないけど…オモチャを取り上げられた子供みたいな顔するからさ……何か、片付けにくくて…」

長男に甘い、三男。

「…まあ、あの空地さんやからな…怒りはしないやろうけど…」
「うん…全然怒らないな」

三男に甘い、長男だ。

というか、長男な全体的に優しい人物なのだ。

「…で、今日がアレの日…なんやな…」
「…ああ…あの、数ヶ月に一度のな…」

アレの日。とは、自室で半ば引きこもり気味の兄、空地が数ヶ月に一度部屋を出て、会社に来たゲームを持っていくと同時に、新しいゲームのシナリオを貰いに行く日なのだ。

何故、この電波時代にデータで送って、もらうのではなく、直接渡し取りに行くのかというと、ここ一年間、電波ジャックが各地で出没して、データを根こそぎ奪って裏サイトで流し込む事件が多発しているからだ。

会社は念のため、大切なデータは各会社員に自身でを持っていくように義務づけている。

かく言う空地兄さんも例外ではないので、数ヶ月に一度、自分で会社に向かって届けに行くのだ。

オレは、この日を不安と期待がおり混ざった感じで待っていた。

空地兄さんが泣きそうな顔をしようとも、この日だけは部屋を片付ける最大のチャンスなのだ。

これを逃したら最後、また数ヶ月間は部屋に入れない。入るうとしても仕事中には入れないし、掃除ロボットも入れられない。

大切な物があるということなので、掃除ロボットに掃除させるのは危ないのだ。

だから、今日オレは、過酷な山に挑戦する、登山家の様な心境で1日を過ごしていた。

「…まあ、頑張れや。海斗」

「おう。もう覚悟は決めたぜ」

「…うーん…間違ってるよな、間違ってるないよーな…」

決意を固めていたら、茶衣と別れる道まで来ていた。

「じゃ、またな！茶衣」

「お、おー。…またな」

帰ろうと、足を自宅への道へ向けた。

「…海斗！」

「ん？」

すると、突然茶衣から名前を呼ばれた。顔だけ振り返る。

「なんだ？」

「…お前なら大丈夫や」

「……?……は……?」

「……お前は心も強い。何があっても乗り越えられる」

「……??……大袈裟すぎないか……?」

ただの部屋の掃除だ。

「……そやな。ちと大袈裟やったわ」

そう言って、いつもの様に笑う茶衣。この笑顔がいつもより、ちよつと違って見えたのはオレの気のせいだろうか?

「……はは……そうだよ。大袈裟。……じゃあな」

「……じゃあな」

そうしてヒラヒラと手を振る茶衣。

オレは疑問に思いながらも、自宅へ向けて足を進めた。

「……わしが……傍にいるさかいに……」

そう茶衣が呟いたのに、オレはいつまでも気付かなかったんだ。

第1章 異世界へ 友情 (後書き)

毎回短くてごめんなさい…

次は兄、空地さんの部屋へ直撃です。

海斗は一体どうなるのでしょうか…

続きをお楽しみにです。

第1章 異世界へ 転送

自宅へ戻ったオレはまず、空地兄さんが部屋にいないか確かめることにした。

空地兄さんの部屋は安曇野家の三階建て（今ではこれが普通）の一階でも二階でも三階でもなく、地下一階にある。

電波を抑制する装置があるものの、もしも電波が外へ漏れることのないよう、地下に部屋を造ったのだ。

玄関に入って、ちょっと入った右の方に地下に繋がる階段がある。そこを降りて、オレは地下室へ入っていった。

部屋に入った瞬間、まるで違う世界に入り込んだような感覚になった。

部屋の中は全体的に薄暗い。そこにコンピューターの光が仄かに明るく室内を照らしている。その灯りのお陰で、視界に見渡す限りの機械が部屋一面に広がっていた。

「…何度来ても慣れねーんだよな…この部屋」

日常から機械に慣れてはいるが、ここまで映画みたいな近未来のコンピュータールームに入ると、ついていけないような、現実^{リアル}に取り残されたような錯覚に陥る。

「…空地兄さんは…いないみたいだな」

チカチカ光る部屋を見ながら、兄さんが不在かどうか確認する。床にはゲーム機やらゲームソフト等が転がっていて移動が難しい中、なんとか頑張って部屋の中を見ていった。

「…さて、掃除、掃除!…と、その前に着替えねーとな」

そう言っつて、扉に引き返そうと方向転換をした時、ガシャンッ…と誤って中型鍋の大きさの小型機械を倒してしまった。

「あっ…!」

それは機械としては小さいが、ある程度重量があるのか、他に床にあつたゲームが、見るも無残な姿となつて床に散らばつた。

「…やべえ……」

無断で部屋に侵入して、機械を倒して、大事にしているゲームを壊されたとなれば、あの温厚な兄さんでも許してはくれないだろう。

「…怒られる…かな…」

心中に不安を抱えながら、一応まだ無事そうに見える小型機械を元に戻した。

機械は円柱状で上に突起物が付いており、その頂点に輪っかの光る物体が乗っていた。

さつきはただ光っていただけの輪っかが、今は小刻みに点滅を始めた。

「こ…壊れた…か…?」

よく分からないので、適当にペシペシと機体を叩いてみる。すると、輪っかの光が強さを増した。

「!…本格的にヤバいか?…」

焦って光が強くなっていく輪っかを反射的に手で掴んでしまった。

すると…

ヴアアアアンツ…

深紅の光が激しく唸るように部屋一面に輝き、広がった。

目の前が真っ赤に、真っ白になり、目を塞ぐしか防ぐ方法がなかった。何も見えなくなって、同じく頭の中も真っ白になり、身体感覚を失った。

「…っ…っ…っ…」

一時して、やっと気持ち悪い感覚から解放された。

「…っ…ハア…ハア…」

まだ気分が悪くて吐き気はするが、さっきよりは良くなっていった。

まだ少しチカチカする目を、そっと開いた。

開けた視界には、さっきまでいた空地兄さんの機械ばっかの部屋は映っておらず、見たこともない薄暗い石造りの部屋が一面に広がっていた…。

第1章 異世界へ 転送 (後書き)

いよいよ、次話から異世界突入です。

やっと書けるかと思うと、わくわくします。

前置きが長いですね…

すみません…

次からもっともっと達筆に出来るように頑張ります。

そして、楽しんでもらえれば、幸いです。

登場人物紹介 海斗（前書き）

今回は登場人物のプロフィールを紹介したいと思います。

退屈だとは思いますが、海斗くんが頑張って紹介しているので、応援してあげてください。

登場人物紹介 海斗

よっ！海斗だ。

今回は初回プロフィール公開って事で、オレが紹介するぞ。

まずはオレ、

安曇野 海斗だ。

現在 高校1年生

年齢 16歳

身長 155cm

体重 44kg

誕生日 9月30日

趣味 料理・洗濯・掃除の家事全般

特技 剣道

見た目は幼いってよく言われるな…多分、この身長とかの所為だ
と思うけど…。こんなんでも、一応主人公らしい。

後、えーと…『作者からの付け足し』？…だそうだ。…『海斗
は曲がった事が嫌い。けど、女の人と子供だけにはやさしい子な
んです。矛盾ですよね（笑）』…いや、（笑）って…そこ矛盾し
ちやいけないとこじゃねーか？
…まあ、次々いつてみるか。

次はオレの一番目の兄さん、

安曇野 空地。

年齢 25歳

身長 172cm

体重 54kg

誕生日 6月1日

仕事 ゲームクリエイター

趣味 ゲーム・アニメ鑑賞・フィギュア集め・機械いじり

特技 ゲーム製作

…オレはただの引きこもりのヲタクだと…あ、いや…何でもない。

性格は温厚で優しいぜ。

見た目は前髪が異常に長いな。痩せっぽっちなんだけど、オレより背高いんだよな…どうしてだろう…

次いくか。

次はオレの二番目の兄さん、

安曇野 陸也^{りくや}。現在 大学2年生

年齢 19歳

身長 180cm

体重 58kg

誕生日 1月27日

趣味 読書・筋トレ

特技 バスケットボール

見た目はメガネに短髪黒髪。キツチリしてる印象があるけど、意外に筋肉ムキムキ…「ムキムキな訳がないだろう。しなやかで無駄のない筋肉が付いているだけだ」……だそうです。

因みに、服着たらただの文学系男子に見えんだよなーメガネだし。背が高いのは遺伝子関係ないのか…？

つ、次だ。次。

次はオレの妹、
安曇野 天花。

現在 小学3年生

年齢 9歳

身長 116cm

体重は…「お兄ちゃん！れでいの体重を公開するなんて、失礼だよ
っ！」…あっ…ごめん、ごめんな！天花…！ …体重は非公開とい
うことで…（汗）

趣味 手芸

特技 服のデザイン

うちの天花は本当に可愛いんだぜ！まだ小3なのに頭がいいしな。
耳の上のところで二つ結びしてるのが本当に似合って可愛いんだよ。
うちの妹はサイコーだ！

「…典型的なシスコンやな…」（茶衣）

じゃあ、次いつてみよう！

次はオレのダチ、

神奈沢 茶衣。

現在 高校1年生

年齢 15歳

身長 175cm

体重 56kg

趣味 ナンパ

特技 関西弁喋る事

…だな。

「だな。つちやうやるっ！どう考えてもおかしいやる！誰が趣味がナンパで特技が関西弁喋る事やねんっ！ボケるのも大概にしときーや！」

…別にボケた訳じゃないけど？

「尚更悪いわっ！」

…隣に並ぶなよ…オレが背低いのが浮き出ちまうだろ…。

「そんなん、皆知って…あ、いや、ちやうねん。今の無し」

…と、言うわけで、今回はこれで終了かな？

「…酷いわ…ガン無視や…というか、海斗に変な誤解されてんのがショックやわ…」

…ん？何か言ったか？

「…いいや…別にイ」

じゃあ、今回はこれで！また主な人物が登場してきたら、紹介するからな！

またなー！

登場人物紹介 海斗（後書き）

… 5人しか公開出来ませんでしたね…

また主な登場人物が出次第、紹介させて頂きます。

…さて、次は果たして誰が紹介してくれるのでしょうか…

頑張つて続き書きますので、

それでは、また次話でお会いしましょう。

第1章 異世界へ 召喚 (前書き)

ちよいと長いかもしれません…

配分がよく分らないです。

楽しんで頂けたらうれしいです。

しかし、オレと決定的に違うのは、その人物が周りのマントマン達と同じ深紅のマントで、頭から足の爪先までスツポリ全身を覆っているところだ。

僅かに見えている口元は笑みを浮かべているのか、両方の頬が吊り上がっている。声から察すれば、多分男であろう。

「……………」

「…おや?…これは失礼しました。我が君をお迎えしているというのに、この姿はいけませんでしたね」

そう言つて、男はゆっくりと被っていたフードを脱いだ。

フードの下には、均等に整った顔立ちに少し細目の灰色の瞳、毅然とした表情だが、どこか影がかかっているように見えた。背は多分(というか絶対)オレより高い。

そんな奴に一番目を逸したのが、血に染まった様な赤黒い髪だった。それは男の肩口まで伸びていて、少しウェーブ掛かっている。その髪が、何とも言えぬこの男の不気味さと異様さを表している様だった。

男は真つ赤なマントは取らずに、フードだけを外した状態でこちらへ近づいてきた。そして、オレから1メートルくらい離れた所で立ち止まり、そのまま膝を床につき、跪いた。

「…我らが君よ…改めてご挨拶致します。私は《レッドプリンセス・ナイツ赤姫騎士団》が一員。団長を務めさせて戴いております。…キルノデイ、と申します」

男は…元い、キルノデイは、跪いた状態でそう名乗った。真つ直ぐ、オレの目を見ながら。

その灰色の目は、何もかも分かっていますよ的なものが宿っていて、何故かイケ好かない奴だな、と無意識に感じてしまった。

勿論のこと、オレにはさっぱり状況が掴めなかった。だから…

「……いや……あんた誰…てか、此処はどっこおッお”ツツ!!?!”」

当然な疑問を投げ掛けようとした。…が、突如背後から現れた真っ白な腕に体を抱かれ、邪魔をされてしまった。

その所為で、セリフ最後に変な声を出してしまった。

「…っつ!!?!…だっ、誰だっ!?!」

急いでその腕を外そうとすると共に、腕の主を確認する。

オレが振り返って見えたのは、真っ赤な深紅のマントと、そのマントよりも赤くて長い髪だった。

それは燃え盛る炎の様に、オレに絡みついていていた。

「…うふふふ…やっと現れてくれたのね…ワタシのお姫さま…!!」

オレに抱きついている格好となる人物が、突然女の子の様な甲高い声を出して喋った。

声と…後、抱きつかれてるから分かる、背中に当たる柔らかい感触から、この人物は女だろう事が分かった。

…しかし、得体の知れない女性から後ろから抱きつかれて、嬉しいのか気味が悪いのか…よく分からなかった。

「…君、誰だよ…取り敢えず、離れて…」

「嬉しいわ…！ああ！嬉しいわ！…あなたのその麗しい声が聞けるなんて…！」

背丈からしたら少女くらいの女の子が、ガバツと顔を上げて、感極まったような表情でそう叫んだ。まだ幼さが残る顔は、目がぱっちりですその瞳は深海の青色くらいに深い碧だった。そんでもって、もの凄い美少女だった。

「……いや……」

「…ああ…ああ、もつと聴かせて…あなた様の声を…」

抱きついていた腕を片腕だけ上げて、その手をオレの顔にそっと添えた。

オレはそんな潤んだ目を見ながら、顔が赤くなるのが分かった。

「……いや…だから、その……」

「アリス。いい加減にしろ」

そこで、思わぬ救世主が現れた。

現れた…というか、周りに輪になって並んでいた円から抜け出してきた（多分この美少女も）新たなマントマンは、赤髪の美少女に冷たく言い放った。

「この御方は、お前などが気安く触れて良い相手ではないのだ。…速やかに離れる。まだ拘束の刑だけで許してやる」

「いやーよっ！…ワタシはこの方が現れてくれるのをずっと待っていたのっ！簡単に手放す訳…」

美少女がそこまで言っつて、話すのをやめた。否、次の言葉を出そうとも出せなかったのだ。

「ッ…なにを…」

「…離れると言っただろう？あの時なら拘束の刑だけだったが、口答えをした時点で真空の刑も追加だ」

「…つく…ッ…」

徐々に少女の腕の力が抜け、オレはその腕から逃れた。

しかし、目の前で起こっている事が理解出来なかった。

美少女があらゆる方向に大きな瞳を泳がせ、苦しそうに顔を歪めているのだ。

理解しろというのが無理というものだ。

さっきから意味不明な事を喋っていた少女だが、苦しそうにしている人を黙って見ているというのは、オレには耐え難い事だった。

「おいっ！？大丈夫か！？」

そう言っつて、少女を抱き抱えた。

すると、少女は苦しみながらもオレの方を見て、ゆっくり微笑んだ。

そうして、突如真つ赤な炎が少女を中心として舞い上がり、中心となった少女はオレの目の前で炎と共に消え失せていた。

「…っ！?!?!」

いきなり炎が出たのと、少女が燃え消えた現実で頭の中が混乱し

た。

「…心配には及びません。彼の者は真炎の魔術を遣う者。あれは焔での転送魔法でしょう」

そう言つて、そんなオレに近づき、キルノデイと名乗った男と同じ動きで跪いた謎のマントマンは、そつと被っていたフードを外し、話し出した。

「…お詫び申し上げます。我が主よ。彼の者の無礼はちゃんと罰する所存。…お許し下さい」

そう詫びて頭を下げる男は、金掛かった茶色の髪を揺らして謝っていた。

…誰に？…つまり、オレに。

オレにはどうしてこいつがこんなにも真剣に謝るのか分からなかったが、何故か、こいつの顔をもつとよく見てみたかった。

オレが声を掛けようとしていたところに、キルノデイが喋りだした。

「誠に申し訳ありません。我が君よ…あの者はまだ若く、礼儀がなっていないのです。…しかし、あの者も我が《赤姫騎士団》の一員より、我が君をお守りする者です。どうか、広大なお心遣いを…」

そう言つて頭を下げるキルノデイ。

男二人に頭を下げられている今のオレ。どんだけシュールな絵面だよ。しかもどっちも得体の知れない不審人物である。

(とというか、こいつら本当に誰だよっ!!?…そして此処はどこなんだよおおー!!?)

心の中で絶叫するオレ。

そんなオレの頭のと、ここに現れる前の空地兄さんの部屋であつた出来事を思い出した。

(…確か…オレは空地兄さんの部屋で掃除を始めようとして…あ、その前に制服を着替えようとしたんだよな…)

自分の着ている服を見てみると、まだ制服を着ていた。ということとは、部屋を出る前に起こつた事…

(…!!…そうだ!オレ、あの小型機械を倒しちゃって…起こしたら輪っかがピカピカ光ってて、叩いたらもっと光って、咄嗟にあの輪っかを掴んで…)

次の瞬間、目がつぶれるほどの真つ赤な光が出て、身体の間が気持ち悪くなつたのだ。

(…もしかして、あの機械の所為か…?)

それしか思いつかない。

空地兄さんはいつも変な機械を造るのが好きだからな…

(…あれは転送装置だったのか…?…いやでも、この電波時代で、こんな場所があるわけがないし…しかも変な奴らがいるし…)

ではあの機械は何だろう…。

そう考えていて、ある考えが海斗の頭の中に浮かんだ。

(…！…もしかして…あの機械は…ゲーム機…か…？)

あり得ない事じゃない。あのオタクでゲーム好きな兄さんの事だ。こんなにリアルで幻想的なゲームを造ることなんて難しい事ではない。ましてや機械学が異常に発展している時代だ。ゲームの中に入り込んだように脳を操作する事なんて朝飯前だ。

(…ゲームの中っていうなら辻褄が合うな…)

だって普通、こんな真つ赤なマント集団なんていないし、可憐な美少女が突然燃え上がったりしない。

(…空地兄さんも迷惑な物を造ったもんだ…)

海斗は勝手にそう結論付けて、頭の中を整理した。

(…さて、これがゲームとしたら…うーん…取り敢えず、^{クリア}攻略しない…いけないよな…？)

あんまりゲームとかしないから、どうやったらクリア出来るのかさっぱり分からなかったが、取り敢えず話を合わせとけば…何とかなるだろう。と思った。

「…や…許すとか許さないとか…別に気にしてないし…」

実際、あんな美少女に抱きつかれて一般男子生徒が嬉しくないはずがない。

「…おお！有り難きお言葉！なんと慈悲深い御方なのでしょう！」

オレの言葉を待っていましたとばかりに、キルノデイは頭を素早く上げ、目を輝かせながら自賛した。

その様子にちょっと引いたが、これもゲームの中から出るためだと我慢した。

そして、ちらりとまだ頭を下げている男の方を見た。

男はそつと頭を上げた。するとそこには、またしても整った顔立ち、いわゆる美形がそこにいた。

長い金色のまつ毛、キリツとした瞳はオレと同じの黒い色。闇のような瞳に見つめられると、何もかも見透されているような感覚になる。

「…有り難うございます。我が主よ」

「…あ、いや…別に…」

何故か居心地が悪いような感じになる。

「…というか、さっきから思ってたんだけど…我が君とか我が主とか…何？」

ずっと疑問に思っていたことだ。そこで、キルノデイが血の色のような赤黒いを揺らしながら、言い出した。…多少大袈裟過ぎるよ
うな気もするが…

「それは失礼しました。…我が君は召喚されて間もなく、まだ覚醒はされておらないのですね…」

「…は？…覚醒…？」

「仕方がありません…我が君は私達の希望であり…まだ赤子のよう
に純情…」

「…赤子…？」

「私めが直々に手取り足取りお教えいたしましょう…！」

「…いや…それはいらねー…かも？…」

キルノディはオレの言葉を無視するように大きく腕を広げた。

「ようこそ！我が君…我が麗しき姫よ！」

キルノディがそう言うと、周りにいてずっと黙っていたマント集
団達も声を合わせて復唱した。

『ようこそ！我が麗しき姫よ！』

オレは呆然とそれを見やる。

「……ひ…め…？」

「ええ。我が姫君よ。…我がビシエリク国へようこそいらっしや
いました」

キルノディがにつこりと嗤い、反対に冷淡な男は無表情に跪いて
いた。

「…心より歓迎いたします」

キルノデイは不気味な笑みを浮かべて、そう言った。

第2章 男姫さま誕生 城にて

「…は？…姫って…」

いやいやいやいや！

おかしいつて！

誰が麗しい？誰が姫だつて？

…オレは男だつっのっっ！！！！！！

元々、召喚って何だよ！？ビシエリク国なんて変な国、聞いたことねーよっ！！！！レッド…プリン…？…分かんねー！！！！英語は苦手何だよーっっ！！！！！！

「……ふー…」

等々と頭の中で考え、心の中で叫んでいたら何故か疲れた。怒鳴りたかったが、無意味な事はしたくない。

ツッコんでもツッコミきれねーよ…。

最終的には、これはゲームで空地兄さんの創作性が入っているのだから仕方ない…と無理やり思い込んだ。

(…しかし…これはどういった趣旨のゲームなんだ…？)

姫ってんだから、女の子向けのゲームなのか？乙ゲーか？…だと

したら、どつやって…

「ごちゃごちゃと考えていて、頭が混乱した。元から色々考えて動くのは苦手なのだ。」

思いついたら即行動！それがオレのスタンツだ。

だから、もうあんまり考えずシナリオに身を任せた。

「…おや。お疲れのご様子ですね」

パチンツ…

そう言っつてキルノディは指パチンをして、マントマンの誰がを呼んだ。

「ユリエル。我が君をお部屋にお連れする。準備の程は？」

「出来ております。騎士団長」

そう答えて出て来たのが、およそ170cmはあるだろう、人物だった。多分空地兄さんと同じくらいだろうと検討をつける。

しかし、驚いたことに真っ赤なフードを外したところには、またもや綺麗な顔立ちが。青色の長い艶やかな髪を頭の上でポニーテールにして、キリリとした目と眉からは強い意志がはっきりと伝わってきた。

年齢は20歳くらいであろうか。クール・ビューティーという言葉がしっくりとくる印象だった。

この中には美形しか存在しないのかっ！

というツツコミを入れたいほどに、美男美女が勢揃いしている。

「…どうか他の奴らが普通でありますように…」

まだ顔を出していないマントマン達に念を送りながら、海斗はそ
う小声で呟いた。

「さて、参りましょう。我が君よ」

キルノデイが手招きをし、そう言った。

「…は？参るって…どこに？」

「勿論。我が君がゆっくりとご療養出来るお部屋に、でございます」
「…この部屋、扉とかないけど、どうやって出るの？」

石造りの部屋を一面見渡しても、出入り出来るような扉がない。

…否、ではここにいる人々はどうかやって部屋に入ったのか…？

…まあ、これはゲームなんだから、そんな不自然でもないか…？

そんな事を思っていると、キルノデイはスツと、石造りの床を指
で示した。

「これで移動が出来ます」

「…これ…？」

キルノデイが指で示しているのは、床に描かれた幾何学的な模様
だった。

それはまるで、子供の頃に読んだ絵本の中の、魔方陣みたいな模様だ。

「はい。…細かなご説明は後に致しましょう。まずはお部屋にご案内致します」

そう言って、真っ赤なマントの中から白っぽくて長細い…まるで人間の骨のような物体を出して、それを模様を中心へ置いた。

「第十二章、瞬間の詞：転送魔術」

さつきとは一変した朗々とした喋り方で、そう唱えた。…次の瞬間、またもや空地兄さんの部屋からここに来た時のような気持ち悪い感覚が身体を支配した。

「…あ……うウ……」

吐き気がする。足が地に着いている感覚がしない。

グラグラとなる不安定な足元の所為で、オレは倒れそうになった。そこで、見計らっていたのか、無表情男がオレを抱き留めてくれた。

それはとても安心感をもたらしてくれて、そのままたれかかっていた。

そして数秒たってやっと気分の悪さから解放された。

気持ちが悪く中でも、ゆっくりと周囲を見渡してみると、さつきの石造りの薄気味悪い部屋と違って、豪華な装飾品をあしらった、多分オレの8畳部屋の3、4倍のくらいの広々とした空間があった。

その空間には大きな窓がついており、豪華なカーテン。その近くには、大きな天蓋付きのベットが置いてあった。そして、天井にはキラキラと輝くシャンデリアが……

…どここの貴族さんの部屋だよっ！！！！

と大きな声でツツコミたかったが、周りには不気味な真っ赤なマント集団がいたので、それは控えておいた。

それにしても、瞬間移動なんてスゴいな…まだ現実には物質転送し
が出来なくて、人間なんて転送出来ないのに…流石はゲームだ。

ポカーンと口をバカみたいに開けて驚くオレに、抱き留めてくれていた男がそつと呟いた。

「…我が主君よ、ご機嫌は？」

そこで、オレはまだこの男にみつともなくもたれかかっているのに気が付いた。

無意識に羞恥で顔が赤くなった。

「…つべ、別に…もう大丈夫だ！…あ、ありがとう…」

もごもごと口の中でそう言いながら離れた。

それがどうしてか、名残惜しく感じた。

「…いえ、お礼を言われる程では」

男は何事もなかったように海斗から距離をおいた。

「さて、お部屋にご案内致しました。今日からここでゆっくりお休み下さい」

そう言つて優雅にお辞儀をするキルノデイ。

「お休み下さいって…ここで!!?」

「おや…何かご不満事でもありましたでしょうか?」

キルノデイは不可解そうに方眉を上げた。

「い、いや…不満も何も…ここ広すぎて…」

…これの4分の1くらいでいいです。

「しかし、これでも抑えた方なのです。 姫よ」

そう言ったのは、さっきのポニーテール美女。
美女はオレが視線を向けると、スツと優雅に跪いた。

「…ご挨拶申し上げます。私は《レッドプリンセス・ナイト赤姫騎士団》の副団長を務めさせております。ユリエル・ピュール・フラインスです」

「ゆ、ユリエル…ピュ…フライ…?」

「ユリエル・ピュール・フラインスでございます」

「そ、そっか…面倒だから、ユリエルって呼んでいい?」

「はっ！感激の極みであります」

「…いや…そんな感激するほどの事じゃ…」

…ないと思う。

この異常なまでの改まった感じは慣れない。とりあえず、跪くのはいい加減やめて欲しい。

「…で…これ、抑えたの？」

「はい。その通りです」

いやいや。どう見ても学校の体育館ぐらいあるって…

そもそも総勢20人くらいいるマントマン達とオレを入れてもすんごく余るスペースがあるのだ。

これで抑えてるとか言われても納得出来ない。

…掃除とか結構時間かかるだろうな！。

とか、毎度の主夫感覚で感想を考えてしまう。

「…部屋とか変えれない…？…もうちょっと狭い部屋に…」

「無理です」

バツサリ言われた。

…ですよね！。

やむを得ず、この部屋を借りる事にした。

「我が君よ。ご納得して戴きましたか？」

「…はあ…まあ、うん」

「それは良かったです。…さて、我々はこれで」

そう言って部屋から出ていこうとするキルノディ。そして、それにゾロゾロ続くマント集団。

「…って！おいおいっ！」

それはダメだろう！全っ然！説明されてないのに出ていかれてもっ！

…それに、このバカでかい空間に1人で残されるのは…少し不安がある。

「どうしましたか？」

キルノデイが不審気に振り返ってそう問うた。

「…いつ、いや…趣旨っていつか、シナリオっていつか、進め方っていつのを…」

「…シナリオ？進め方…？」

「あつ、いや…その、説明をして欲しいんだけど…オレがここにいる理由って言うか、突然ここに来て、意味分かんねーっていつか…」

「…ああ、そうでしたね。私とした事が、忘れておりました」

さも今思い出したかの様に振る舞った。

…ウソくせー…

つい、そうぼやいてしまう。

オレとキルノデイは部屋にあったフカフカのソファに腰掛けて話す事にした。後の全員はきっちり並んで立っている。

ソファアはフカフカだし、オレ達を囲む様に立っているので座っているオレが居心地が悪かった。

「…さて、何かお伺いしたい事はおありですか？有りましたら、それからお先に答えていきますが？」

「…えっと…」

やはりさっき疑問に思った事を聞いてみる事にした。

「…ここってどこ？」

「ここはナイトルト大陸の中心に位置する、ビシエリク国にございます。北部、東部、西部を他国に囲まれ、南部はジョーオン海に繋がっております。そして、今現在おられるここは、ビシユアル城、ビシエリク国の中心部にあり、王族がお住まわれる城です」

スラスラと答えてくれるキルノディ。しかし、半分もオレには理解出来なかった。

…聞いたこともない大陸名と海洋名で、ここは元住んでいた世界じゃないんだな、という事がなんとなく分かった。

…まあ、ゲームだから当然なただけだ。

「…どうしてその…ビシエリク？…国にオレが居るんだ？しかも、王族…王様が住んでる城に…？」

「私共が召喚…お呼びしたからでございます」

「召喚…？どうやって？」

「召喚魔術を遣ってですが？」

…魔術！出た！ファンタジー！

「…そう…（ここはツッコまねーぞ…）…じゃあ、レッドプリン…」

「^{レッドプリンセス・ナイト}赤姫騎士団にございます」

「そう！そのレッドプリンセス・ナイト…ってゆーのは何だ？」

「我が君をお守りするために作られた、集団の名前にございます」

「…我が君って…オレか…？」

「はい」

「…だよな…（流れからいつて…）…何でオレを守る必要がある？」

「それは、我が君が我が国の姫であり、希望であり、紅の鍵であるからです。これは先ほどの回答も含まれております」

「…姫？希望？…紅の鍵…？…っつーか、誰がお前らの国の姫だよっ！」

「あなた様にございます。我が君よ」

「っ！誰がっ！オレはおと…」

「…こ、だっつーの！」

と言いつつになつたところで口を閉ざした。…何故か言つてはいけないような気がしたのだ。

じー…つと、40の瞳がオレを凝視しているような気がした。

その中で、キルノデイの瞳がキラリと光った。

「…しかしながら、我が君の言葉遣いはなっておりますね…まるで男性のような…」

「え…そ、そーかな？普通だろ…？」

「…我が君がそうおっしゃるのならば…」

「そ、そうだよ！…え、えーと、次は…」

慌てて質問を続けようとしたところで、キルノデイ後ろに立っていたマントマンが彼に何事かを耳打ちした。

「…そうか…分かった」

そう言ってキルノディは部下らしきマントマンに首肯し、オレに
向き直った。

「誠に申し訳ないのですが、ここで一度切り上げても宜しいでしょ
うか？…ご説明はまた後日にさせて頂いても？」

「あ、うん…いいよ！どうぞ行っちゃって！」

その申し出を内心安堵しながら、承諾した。

「申し訳ありません。…では、また後日に。護衛の者を数人残し
ておくので、安心してごゆっくりお休み下さい」

「はいはいー了解」

「では」

そう言っでキルノディ達は二人を扉の前に、そして1人を部屋に
残して去っていった。

第2章 男姫さま誕生 城にて (後書き)

日にちを空けてすみません…

もしかしたら週1更新になるやもしれませんが、ご了承ください。ば嬉しい限りです。

姫と護衛

キルノデイ達が部屋を出て、部屋に残ったのはオレと護衛官の2人だけだった。

…しかも残った護衛官は、あの無口な金掛かった茶髪の無愛想な男だった。

「……………」

無駄に大きな部屋に、不自然な沈黙が流れる。

いきなり2人だけにされても…と思いながらも、何か会話した方がいいよな…と思案する。

そつ話の話題を考えていると、意外にも向こうから話し掛けてきた。

「どうぞご自由にお休み下さい。私は護衛の身なので傍に居ないといけないのですが、居ないものと考えて下さい」

開口一言目がそれだった。居ないものって…それは無理だろ…と思う。

ただでさえ暇だから部屋中を歩き回ったり、移動したり…じっとしてる時でさえ、ジイー…と、こちらが穴が開きそつなほど見てくるのだ。気にしない方が無理だ。

「…あの…」

「何ですか」

「い、いやぁ……その……そんなに見られると、居心地が悪いとい
いますか……休めるもんも、休めないというか……」

「……そうですね……ならば以後気をつけます」

そう言ったが、回答前と後で全然変化がないように見える。

やっぱりジイー……っと見てくる。

「……えっと……」

気になって黙ってる事が出来なかったので、話し掛けてみるこ
とにした。

「……お前の名前は何て言うんだ？」

「……………」

無難な質問だったと思うのだが（てか名前知らないし）、男は黙
っている。

「……えっと……？」

「……貴方様にお教え出来るような名はございません」

ズバツと言われた。

そう言われてちょっと傷ついた。……だって、それはオレが名前を
教えるほどの者に値しないということだろう？誰だって傷つく。

「……それは、オレだから……？」

「はい」

即答だ。やっぱりグサツとくるなあ……。

肩を落としてしまえばーんとしてると、何か疑問に思ったのか、男が口を開いた。

「…何か誤解されていますか？」

「…誤解…？」

「私は貴方様に問題があつて、名乗らないのではないのです。…私に問題があるので、名を名乗れないのです」

「…お前に…？」

何だろう。しかし、無表情な顔からは何も感じ取れなかった。

「…じゃあ、何て呼べばいいんだよ？」

「呼称などは不要です。呼びつけたい時にお呼び下さい」

「！それじゃ、不便だろ」

「…何故ですか？」

本当に疑問に思ったような顔をする。この奴らは、良いも悪くも扱い辛いつたらありゃしない。常識が違う風なのだ。

「…呼び名が無いと、特定の奴を呼ぶのに不便だろ」

「そつでしようか」

「そつだよ」

半ば呆れながら応える。

「…失礼ながら、ならば、我が主のお名前は何と申すのでしょうか？」

「え？」

そう言えば、教えていなかった。誰も聞いてくれなかったのを忘れていたのだ。

「私…俺も、聞いてくれなかったから応えなかった」

「？」

「…俺には名は必要ない…」

なんか、ただならぬフウインキが漂っていた。いつの間にか『私』から『俺』になってるし。

「…どうかしたか？」

そう話し掛けたら、無表情だった顔を少し歪めて、少し慌てた様に言った。

「…いえ、何もございません。ただ、名などただの呼称。私には必要ないので」

そう言われた瞬間、カチンときた。そしてそう感じた瞬間には、思った事を口に出していた。

「だからあ！名前を教えろって言ってんだよ！…オレは自分の名前を教えない奴に安心なんて出来ねーし！一緒に居たくもねー！」

言いながら、ズカズカと男に近づいていく。

近づいていくにつれ、そいつはオレより頭2つ分くらいも背が高い事に気が付いたが、構わず首元に手を伸ばして、服を掴んで自分の方に引き寄せた。

突然の事に、男は驚いた顔をしながら、服を掴まれたので中腰気

味になりながら身体を傾けた。

「海斗！」

「…？」

「オレの名前は、安曇野海斗だっ！覚えとけよ！コンチクショウ！」

怒鳴るように早口でまとめた。

男は呆然とした、まるで目の前で信じられない物を見たような感じでオレの顔を凝視する。

「…返事は？」

「…は、はい…」

オレの声で、我に返ったように返事をする。でもやはりまだ、オレの顔を凝視している。

「…で？」

「…で…？」

「お前の名前だよっ！…オレは教えたんだから、オレに信用してほしかったら、教えるよな！」

「…あ………」

そう発して一時の間が空いた。

「……………」

…そろそろ掴んでる手の腕が疲れてきた。
という所で、やっと男が口を動かした。

「……ウォルト」

「うおると?」

「ウォルト・バン・ラーシス」

「…それがお前の名前か?」

それに応えるように、微かに首を縦に振った。

「そっか!…じゃ、よろしくな、ウォルト」

やっと教えてくれた嬉しさから、満面の笑みでそう言った。

「……はい。こちらこそ、宜しくお願いします。…カイト様」

様付け…いい気分はしなかったが、そう言った顔がさっきよりも
穏やかだったので、ここは言い返さないどころかな、と思っ

「…そういえばさ…」

「はい?」

「お前いくつなの?」

「…17ですが」

「えっ!…!…お、オレと1つ違いっ!…!?」

見えねエー ツツ!…!…!

そう衝撃を受けて、言い返さずおえなかったのは…言っまでもない。

姫と護衛 ウォルト (上) (前書き)

前話の『姫と護衛』の番外編…というか、ウォルト目線で書いたものです。

お楽しみ戴ければ嬉しいかぎりです。

姫と護衛 ウォルト (上)

団長達が部屋を出て行って、部屋に残ったのは俺と：我々が召喚し、呼び寄せた彼の姫だった。

団長からは『任せるよ』とか適当に護衛の任を任された。

やるからには周囲に注意深く目を向けて、姫に害を及ぼすモノを排除する。

そう思つて、姫の一部始終を逃さず見ていた。

姫の姿は少し、他の貴族と変わっている。茶掛かった艶やかな黒髪。大きくこぼれ落ちそうなクリリとした漆黒の瞳。触れてみたくなる程の愛らしい桃色の唇：触つたりは勿論しないが。

ここまでは別段と変わった所はない。しかし、違うのは姫の服装である。

藍色の羽織りモノの下に、白いシャツを着て、男物の様なズボンを履いている事である。

しかも、男の様な話し方をするので、到底お高くとまった貴族の娘とは思えない。

貴族とは大抵が金や権力にものを云わせて、自分達の好き勝手に国の政治や民を振り回している。所謂、駄々っ子なのだ。

その娘となると（これは普通の娘でも相成るが）、妙に自分を着飾つて、洒落た物を欲しがる。

いかにも重量そうな姿を見ていて、こちらの肩が重くなったような錯覚を覚えるくらいだ。

それがこの姫には無く、好んで履くものもいるが、普通、貴族の娘はズボンなどを履いたりはしない。

男物服装や喋り方をしても、この姫は、それが自然の様に振る舞う。その姿が不自然という訳ではなくて、自然と合っているのが不思議だ。

そんな事を考えていると、何やら姫の様子がおかしい。さっきまで部屋の中を物珍しそうに見物していたのに、今はソファーに座りながら居心地悪そうな仕草でこちらをチラチラ見ていた。

…少し観察し過ぎたか…？

と想って、

「どうぞご自由にお休み下さい。私は護衛の身なので傍に居ないといけないのですが、居ないものと考えて下さい」

そう言ったが、やはり居心地が悪そうな表情でこちらを見て、口を開いた。

「…あの…」

「何ですか」

「い、いやぁ…その…そんなに見られると、居心地が悪いといいますか…休めるもんも、休めないというか…」

やはり、見すぎたか…

と想って自重しようと考えた。

「…そうですね…ならば以後気をつけます」

そう応えて、あまり見ないようにしたつもりだ。

「…えっと…」

すると、姫の方から何故か諦め顔で話し掛けてきた。

「…お前の名前は何て言うんだ？」

そう言われて、一瞬息が詰まった。

普通、貴族は自分より身分が低い者の名前を己から訊いてこない。身分が低い者が身分の高い者に礼儀として名を明かす。それが通例だ。

なのに、この姫さまときたら…呆れてものも言えない。…勿論そんな事は顔には出さないが。

「……………」

そして名前…それは遙か昔に捨てたモノの一つだった。

俺には名乗れる様な名はない。『名無しの一匹狼』とは二つ名の他に、団の奴らに勝って付けられたのだが、自分でいうのもなんだが俺自身をよく表現出来ていると思う。

誰にも指図されず、馴れ合わず…そのように今までやってきたつもりだ。

今、団長に指示されて護衛や、今までだって命令されれば仕事をそつなくこなしてきた。

だがそれは付き合いだからだ。仕事として割り切ってやっているもので、自分の意志からやってきたものではない。

俺は今まで通り、仕事は完璧にこなして、しかしそれ以外の指図は受けず、団の連中にも馴れ合わず…そうやって生きていけばいい。

例え最高貴な身分の姫でも、俺の考えは変わらない。

俺には名など無いし、卑しい身分の俺には、名乗る資格もない。だから、

「…えつと…?」

「…貴方様にお教え出来るような名はございません」

そう言ったのだ。

「…それは、オレだからか…?」

「はい」

姫が確認のように訊いてきた。姫だけに限った事ではないが、適当な返事を返しておいた。

すると、おかしな事に姫は顔色を変え、少し困ったように微笑した。

その顔を見た瞬間、異様な罪悪感を感じた。

…何故…何故俺は姫を悲しませているんだ?

そんな思いがぐるぐると頭の中を支配する。

何故、俺には姫が悲しんでいると決め付けているのが分からなかったし、…何故俺までこんなに悲しい気分になっているのかが分からなかった。

そして、見るからに肩を下げ俯いている姫を見て、何か言いたさずには負えなかった。

「…何か誤解されていますか?」

「…誤解…？」

上げた顔に光るものがなかったので、安堵した。
女達は俺の顔を見たら、何故か頬を赤らめるか、真っ青になって涙を浮かべるかの二択なのだ。

姫が後者でなくて良かったと思い、先程の問いに答えた。

「私は貴方様に問題があつて、名乗らないのではないのです。…私に問題があるので、名を名乗れないのです」

「…お前に…？」

これは嘘ではない。問題があるのは俺の方で、姫ではないのだ。
しかし、その問題を問われても応えはしないが。

「…じゃあ、何て呼べばいいんだよ？」

「呼称などは不要です。呼びつけたい時にお呼び下さい」

「！それじゃ、不便だろ」

姫が驚いた様に俺の言葉に反応する。俺は何が不便なのか分からなかった。

貴族は従者などを呼ぶ時に一々その者の名を呼んだりはしない。
呼ぼうとしても、仕える従者が多過ぎて、名など覚えられないのが現状だ。呼称などもつての他。

「…何故ですか？」

「…呼び名が無いと、特定の奴を呼ぶのに不便だろ」

「そつでしようか」

「そつだよ」

特定の人も何も、どうせ覚えられないだろう。そう思った所でムクムクとイタズラ心が湧いてきた。

「失礼ながら、ならば、我が主のお名前は何と申すのでしょうか？」
「え？」

キョトン、と大きな目を点にする姫。

貴族の対して、身分の低い者が高貴な身分の者に名を訊ねるのは最低の不敬だ。

言った瞬間その場で死刑となることもあるが、最低の罰を与えられるのは確実だろう。

勿論、訊かれて名乗る貴族はいない。だから、今自分が言った事は大変失礼なことで、今ここで姫に罰されても致し方ない。

なのに何故その質問をしたか？

それは、それを訊ねられた姫がどんな反応をするかを見てみたかったのと、後一つ、理由がある。

姫と護衛 ウォルト (上) (後書き)

(下) (へ続きます。

姫と護衛 ウォルト (下) (前書き)

結構間が空いてしまいました…。

上下繋がっているというのに申し訳ない。

それでは(下)をぜひどうぞ。

姫と護衛 ウォルト (下)

俺は昔から1人で行動していた。
仲間なんていらぬ。馴れ合う友などいらぬ。

俺は独りでいい。

…ずっと、そう思っていた。

昔から、無口な子供だと言われてきた。

何をするにも無気力で、明日世界が崩壊する、と言われても、はい、そうですか。と受け入れてしまいたいそうなくらい。

この闇の様な瞳。これの所為で、冷たい目をしてる…やら、異端者…やら、随分酷い事を言われた。

…まあ、酷いと思うほどそんな連中とは関わってはいないのだが。

そんな幼少時代を経て、この歳のなるまで色々あり、今『赤姫騎士団』の団員になっている。

正直、姫などどうでも良かったのだ。

昔からの知り合いに団への入団を勧められ、その知り合いにも借りがあったし、何しろ食うにも困る状況だったので、この団へ入団したのだ。

剣や魔術には少し自信があった。

自信…といっても、知人から絶賛されるくらいだから、実際どれくらいの実力があるのか自分でもよく分からない。

団へ入るため、入団テストを受けたが自分の実力を測るには些か簡単過ぎたような内容だった。

だから自分の実力が分からないまま、テストに合格。そのまま入団してしまった。

姫を守るための騎士 ナイト と言われても、自分には不似合いで実感が湧かない。

任務は任務。と割り切ってはいるものの、いざ、命懸けで間抜け貴族を護れ。と言われても、自分の命が勿体ない、と思ってしまう。

そんな忠誠心がないのを見破られてか、俺の態度が気に入らないのか、団の奴らは俺に悪態ばかりついてくる。

表面にこそ出さないが、底無しの悪意に気付かない俺じゃない。

昔からだ。

もう慣れた。

繰り返し言われる嫌味事に。

蔑められる、人々の目に。

だから最初から名を名乗らない。訊かれもしない。

俺の名を知ってるのは、昔からの知り合いか、団長を含めての数人の団員だけだろう。

先程、姫にした質問。

理由の1つは好奇心。後1つは、高貴な姫を貴族として、反論してみたかったから。

どうせ応えてはくれないだろうし、応えてくれたとしても、聞かないからだ。と跳ね返されるだろう。

「…私…俺も、聞いてくれなかったから応えなかった」

誰にも訊かれない。
だから…

「…俺には名は必要ない…」

名などいらぬ。

「…どうかしたか？」

その声で現実に戻された。いけない。少々感傷に浸ってしまった。今は任務中、と切り替えて心配そうに俺を窺っている姫に返事をした。

「…いえ、何もございません。ただ、名などただの呼称。私には必要ないので」

当然の事を伝えた。

だが、そう言った瞬間姫の方から変な音が聞こえたような気がした。そして、

「だからあ！名前を教えろって言うてんだよ！…オレは自分の名前を教えない奴に安心なんて出来ねーし！一緒に居たくもねー！」

怒鳴られた。

驚いて、とっさに思い付いたのが、安心出来ない？一緒に居たくないとは困る。任務に支障が…などという、義務的なものだった。

そんな俺に構わず、怒鳴りながらズカズカと近づいてくる姫。とっさに身を引こうかと思いつたのだが、時遅く、姫に首元の襟を掴まれて引き寄せられてしまった。

誌近距離で見た姫の顔は、何やら怒りに満ちている様子だ。
身長差もあって、中腰気味になった体勢はキツイと思いつつも、
その顔に見入っていた。

「海斗！」

そんな中、小さな口を大きく開いて叫んだのは姫だった。

「…？」

当然、何を言われたのか理解出来ない俺。そんな俺に追加のよう
に姫は付け足す。

「オレの名前は、安曇野海斗だっ！覚えとけよ！コンチクショウ！」

…アズマ…カイト……？

…それがこの姫の名前だというのか…？

…待て。どうしてだ？…どうして卑しい身分の俺に、自分の名を
教える？

確かに名を訊ねたのは俺だ。…しかし、貴族…しかも最高貴なお
姫様が本当に名を名乗るなど、思ってもみなかった。

もしかすると、偽名かもしれない。と考えてみたが、それでは護
衛の身の俺に、何故そんな面倒な事はしないだろう。と考え直す。

どうしてだ…？

そんな疑問が頭の中を巡回する。

真意を探ろうと、姫の…アズマカイトの顔を凝視する。姫の方から俺は、異様な顔をしているだろう。

しかし気にせず見ているも、その表情に他意があったようには思えなかった。すると、

「…返事は？」

「…は、はい」

唐突に返事を求められ、どもりながらも返事をしてしまった。今の姫様には、何か逆らえられないような気迫があったのだ。

「…で？」

「…で…？」

？

「お前の名前だよっ！…オレは教えたんだから、オレに信用してほしかったら、教えるよな！」

…俺の…名…？

「…あ………」

信用…は、してほしい。

でなければ、任務に影響が…

「……………」

…本当に、それだけか…？

…本当は…俺の問いに答えてくれたこのアズマカイトという姫に、
自分も応えたいんじゃないのか…？

…自分の気持ちを…

…自分の言葉で…

…自分の…名を。

「……………ウォルト」

「うおると？」

「ウォルト・バーン・ラーシス」

「…それがお前の名前か？」

確認してくる姫。

アズマカイトという名が嘘でも、それでも良かった。貴族や王族
など、関係ない。1人の人として、俺に答えてくれたこの人に。
俺も応えたいと思ったのだから。

応えのように、微かに頷いてみせた。

「そっか！」

この人が、俺の主君。

「…じゃ、よろしくな、ウォルト」

満面の笑みを浮かべる、俺の護るべき尊き姫。

…ああ、この顔が見たかったのだな。と、自分の真意に気付く。

「…はい。こちらこそ、宜しく願います」

何とも云えない温かな気持ちと、敬意を込めて。

「…カイト様」

俺はその名を呼んだ。

「…そういえばさ…」

和んだ雰囲気の中、思い出した様にカイト様は話し掛けてきた。

「はい？」

「お前いくつなの？」

歳を訊いてきた。

何故そんな事を？と思ったが、素直に自分の歳を答えた。

「…17ですが」

「えっ！！！！お、オレと1つ違いっ！！？」

驚くカイト様に更に疑問を持ちながらも、カイト様は16か…（俺より年上という考えはなかった）…と頭に刻みこんだ。

その後言い返された言葉に、ウォルトが密かにショックを受けていたのは海斗の知るところではない。

姫と護衛 ウォルト (下) (後書き)

ウォルトの過去が少し出て来ましたね。

もっと深い過去があるのですが、それはまた後程。

さてさて、次話からは物語が(というか、海斗の心情が)進んでいきますよ。

向後ご期待を。

魔術世界 1

安曇野海斗。 16歳。

至って普通の高校生。

趣味、家事全般とか。

特技、剣道。

……性別、男。

…え？何で今そんな今更な自己紹介したかつて？

それは今、オレに起きている現状を知らば納得してくれるはずだ！

…今のオレは…

…全体的にフリッフリのレースが付いている衣装を着ているの
さっ！

西洋風の、いかにも遙か昔に貴族とかが着ていたようなアレ！も
う手やら足らへんやら全身がフリフリだ！しかもキラキラ光ってる
し！

…そして一番いけないのが、それが男用の衣装じゃなくて…女も
のだと云う事。

いわゆる、お姫さまドレス。

重いし苦しいし、足がスースーする…。

…どうしてオレがこんな格好してるか？
それについては数時間前に遡る。

*

数時間前。

海斗に与えられた豪華な大部屋にて。

「で、オレは何をすればいいわけ？」

護衛官、ウォルト・バン・ラーシスとの … 多少ごちゃごちゃした事があったが… 和解を経て、退屈になってきた海斗。

「…ていうか、このゲームそろそろ進まねーのかよ… シナリオも今イチ分かんねーしい…」

人間、理解出来ない事が起きるとイライラするものだ。海斗の怒りはマックスになりかけていた。

「つだあああーツツ！！！！分かんねエエー！！！！」

「何がですか？」

「ゲームのシナリオだよっ！！！！！！」

「ゲーム…？」

…はたっ、と気付くが時遅し。

現在オレの護衛官を務める美男子ウォルトは、護衛官なのに何故かお茶を注いだりなどの給仕をしながら、疑問気にこちらを見ていた。

「お茶です。どうぞ」

「…あ、ああ……サンキュ……」

ズズ……

お茶を飲む音だけが静寂な大部屋に響く。

「！……お、これ……うめー……！」

あっさりしてるけど、コクがあって、ミルクと葉の味がマッチしてる。ちょうど良い温度加減で香りも引き立っていて、ミルクティー好きで猫舌のオレ好みのお茶だった。

「そうですか？ただのミルクティーですが……それは良かったです」

「ゴクゴクっ……プハー！ウマイッ！」

「お代わりはいかがですか？」

「うん。あ、でも自分で注ぐよ」

素早くポットを奪って、自分のカップに注ぐ。ついでにウォルトの分も淹れておく。

「はい」

「……あ、有り難うございます……」

申し訳ないようにカップを受け取るウォルト。そうしてゆっくりと優雅に口をつける。

「…美味しいです」

「ん。まあ、お前が持ってきた茶だからな」

「…いえ、」

その言葉を止めてこちらを見る。

「…貴方が淹れてくれたお茶だから、美味しいのです」

そう言うのにこりと微笑するウォルト。

やっぱり美形は笑っても美形だな。と、どうでもいい事を思いながら自らも淹れた茶を啜る。

「…あ、そ…」

「処で、ゲームとは一体？」

笑顔のまま、そう訊いてきた。

ミルクティーを啜りながら固まるオレ。顔が引きつる。

「…え？何のこと？…あー…このミルクティーってどこの葉なんだ？」

「ピシエリク国で採られた葉です。精神安定や疲労回復などによく効きますよ。…話を逸らさないで下さい。ゲームとは？」

「……………」

ちゃんと質問には答えてくれたが、肝心の話し逸らしには成功しなかった。

ヤバイ。どうしょ…。

「あ、あれだよ…ゲームってのはあのさー…」

「…もしや、《ドウルマー》の事でしょうか？」

「…どう…？」

キラリと目を光らせながらそう言うウォルト。全く意味が分からなかった。何だ。ブルマーみたいな言い方をして…。

「……違うのですか…？」

「…あ…あー… ……そっ、そっだ！そっだった！…ど、ドウルマーだよ！ドウルマー！いやーあれはおもしろいよなあー！」

途端に話を合わせようとした。オレの言葉を聞いて、ウォルトが俄然目を輝かせる。…何なんだ…ドウルマーって…。

「ですよね…！あの形式といい、フォームといい…素晴らしいゲームだと思えます」

「あ、うん…あの形がたまないよなあー…！」

だから何なんだよっ！ドウルマーって！

形式？フォーム？…意味分かんねー！

「…まさかここでドウル仲とお会いになれるとは…思ってもみませんでした…」

「ドウル仲…？…あ、そっだよな！オレもだぜ！」

…オタクか…？ドウルマーオタクなのか！？こいつはっ！？

同調してみたが、なんかついていけそうにねえ…。

「もしよければ、この後対戦を…」

ピルルルル…

その時、ナイスタイミングで何処からか音が鳴った。

「…っ！！？」「」

この音は…機械音…！？

どうして…?と思っていると、音の根源はオレが着ているブレザーのポケットだった。

「…あ…！」

…！？
そうだ！これがゲームだとしても、携帯なら電波が届いて使える

出す。
その考えを失念していたオレは、素早くポケットから携帯を取り

遠距離型電波通信携帯機具 …略して 携帯 は、遠くに居る相手と電波を通じて話が出る、ちょーコンパクトな機械なのだ。因みに、話す時は携帯からホログラムが出てきて、まるで相手がその場に居るかのような立体さ。

(音声会話も可能！)

そんな説明はさておき、携帯を取り出したオレは素早くボタンを押した。

『あ…ザッツ…海…と、か…ザッツ……?』

「え…?」

凄いノイズ音だ。着信相手は非通知になっている。しかも、ホログラムで相手が見えるはずなのに、ブレていて見えない。

『ザザツ…おま…ま…ザツ…どこ…ザザツ』

「え?え…?何…」

『…ザツ……ザザツ……い…ッ…く…ザザザツ』

「ちょ、お前誰…!?!」

『ザザツ……かな…ザザツ…ず……ザザザザツ… ブツツ… プー
ープープープー…』

「えっ…待っ…切れた…」

手に持っているたつた今切れた小型機械を呆然と見つめる。

「……今のは…?」

そこで、信じられないモノを目にした様にウォルトが声を掛けてきた。

「あ…これは…携帯で、さっきのは着信」

「ケイタイ?チャクシン?…それはどんな魔術で…?」

「魔術とかじゃなくて…えーと…機械科学かな?」

「魔術でない…?…そうですか。分かりました」

「えっ…分かったの？」

「はい。少々取り乱しましたが、まだまだ勉強不足な事が分かりました」

「……………」

いや…兄さんがどんな設定にしてるのかとか分かんないけど、勉強不足って…。

謙虚なのか天然なのか分からない返答をよそに、今の通信は何だったのかを考える。

ノイズで全然内容が把握出来なかった…着信も非通知だし…やっぱりゲームの中だから、電波が悪かったのか？

そう思って、もう一回携帯を見てみると、そこにはあり得ないものが表示されていた。

《圏外》

つまり、ここは電波が届かない場所という事。

…では何故、通信が…？

急に正体不明の寒気が背中をはい上がった。

誰なんだ？さっきのは…一体ナニ…？

…バターンっ！

「へろへろーウ！待ったかい？僕の可愛い子ちゃん」

そこで、場に合わない発言をして現れたのは……

……変態博士だった。

魔術世界 2

…バターンっ！

「へロへローウ！待ったかい？僕の可愛い子ちゃん」

「……………は？……………」

全体的に眩しい青年だった。

年齢は20代前後だろうか、キラキラ光るレモン色の髪。それを耳の後ろで二つにくくっている。またもや整った顔立ちに翡翠色の瞳。その表情はまだ無邪気さが残っていて、見た目より幼く見える。

そこまではいい。もうイケメン登場は慣れたし。

だが、問題が一つ。

目元には丸い片目眼鏡を掛けていて、丈が短い黒いジャケットを着て、へそ出しをし、パツンパツンのキラキラの黒いズボン。ピンク色の長いブーツ。そして、黒いジャケットとズボンと対極に、真っ白な白衣を着ていた。

ミスマッチでシュールな光景だ。

しかも、派手な登場、開口一言目で変な事を言って入ってきた。

「待たせてごめんネー？可愛いお姫ちゃんを放置プレイなんて、キ

ルキルも駄目な男だよなー？」

妙に甘ったる気な猫なで声を出しながら、軽い足取りでこちらに近づいて来る。

「…は？いや…誰？」

何言ってるのかさっぱり分からないオレだが、何かいかにも変人ばい人に近づかれると、疑問に思いながらも無意識に後退りしてしまった。

「ああっ！逃げないで！僕の子猫ちゃん！」

「…っは！？…こ、子猫…！？」

こいつは危険だ。近づいちゃマズい。

…そんな危険信号が頭の中で発している。

「ふ、ふ、ふ…怖がらないで…さあ！こっちへ… ツブホ…！！」

警戒した猫をあやすように手招きをしながら近づいて来ていた変人が、唐突に頭を前のめりした… というか、された。

「…ツいつたいなー！ナニするんだよー。護衛くーん」

窮地を救ってくれたのは、先ほどドウルマーについて熱く語っていたウォルトだった。

ウォルトはいつの間にか現れていた剣の柄を持ちながら（…多分…というか間違はなくあの柄で殴ったんだろっな…）…口を開

いた。

「は。カイト様に近づく有害な者を排除しろという命令なので、それに従ったまでです」

「…有害って…何気にヒドいな…」

「仕事は仕事なので」

ホントにそれだけカナあー？とか、ニヤニヤと意味の分からない言葉をウォルトに投げつけながら、何故か嬉しそうに強打された頭を擦る。

…マゾか！変人Mキャラの登場なのかつ！？

オレの中でこの変態がそんな位置に置かれつつ、やっぱり思ってしまう疑問を呟く。

「…で、この変人は誰なんだ…？」

「まっ！変人なんてヒドイ！ラリィーって呼んでヨ！」

「……らりい…？」

「ウン 僕の名前だよん」

呼び捨てで構わないからネー、とニッコリ笑顔で言ってくる。

「正式名は、ラトリーク・G・ワナロールです」

そこに凜とした、しかし冷やかさが混じった声が聞こえた。

「あ、キルキルやつと来たんだ」

「…キルノデイです。ちゃんと正式名で呼んで下さい。ワナロル医師」

「なんだよー冷たいぞ。キルキルうー！僕のことはラリイーって呼んでっつていつも言ってるじゃないかあー」

毅然とした態度と共に登場してきたのは、あの不気味なキルノデイだった。さっきの真っ赤なマントを外し、何か西洋風な貴族の格好をしている。

…時代劇かつ！ってツツコみたい願望をよそに、さっきよりはましになったかな？と思った。

ラリイー…基、ラトリーク・G・ワナロルはそんなキルノデイの冷たい態度をもともせず、甘い猫なで声で訴える。

一方キルノデイは、そんなラトリークを見てため息を吐く。

「…はあ…どうして貴方はいつもそう…」

「にしても、キルキル遅かったよねー？何してたノー？もしかして貴婦人達とイケナイ事オ？」

キルノデイの言葉を遮って、ラトリークは変わらない猫なで声でニコニコしながらそう言った。

その言葉にピクピクと眉が動くキルノデイ。

「…私は善からぬ事はしていませんし、勿論貴婦人達とも何もありません。…貴方が速いのです。何処に造ったか分からない城の抜け道をスタスタと行ってしまっ…」

「いやーん 言い訳なんて男らしくないゾ キルキルー！トロいキルキルが、わ・る・い・の」

ね？つと、指でキルノディの鼻先を突くラトリーク。

「……………」

ピクピクピクッ ……

なんか、眉上げ下げ大会とかあったら優勝しそつなくらいの速度になってる。…まあ、そんな大会ないと思うけど…。…あ、眉間の皺が深くなった。

「…えつと…なんか話あつて来たんだろ？何だよ？」

この険悪な雰囲気になんて耐えられなくて、オレは話を切り出した。

まあ、キルノディとこの変態が何で来たのか気になったしな。

するとオレの言葉を聞いたキルノディが、ため息を吐きながら話し出した。

「ええ…申し訳ありません。我が君。…我が君のため、この者をお連れしたのですが…」

この者…と言って、ラトリークを示す。

一方示されたラトリークはニヤニヤニコニコしてオレを見ている。

「…オレのためにこいつを…？」

「フフーン 僕ちゃん、可愛い子ちゃんのために参上したナイトだよん」

疑問気に尋ねたらまた意味不明な事を言いだしたよ、こいつ。

「ナイト…?」

「何を云うっ!! 貴様が騎士ナイトな訳があるはずがないじゃないかっ!」

ラトリークの言葉に、唐突に部屋に現れた人物が、唐突に反発をする。

…ん?何か聞いた事のある声…。

「貴様みたいに体たらくで、身なりも可笑しくて、変人で妙にキラキラしている奴が! 姫を護る騎士だと?…は! 笑わせるのも大概にしろっ!」

あ、最後のキラキラ反発は同意見!

…でも、そんな言わなくても良いんじゃないかと、突然現れた謎の人物を振り返る。

そこには、クールビューティーなお姉さん、美しいユリエルが居た。

部屋に現れたユリエルは、キルノデイと同様真っ赤なマントを脱ぎ、西洋の騎士のカッコいい服を着ていた。…ズボンなのが残念だ…似合ってるけど…。

「…団長。遅れて申し訳ありません」

そう一言断る姿も毅然として綺麗だ。

…さすが美人は違うな、と思っていたのも裏腹に、

…何か変な展開になってきたぞ…。

そう思ったオレ。

この世界で代表格的な登場人物が続々と集まってくる。…しかも若干二名怒ってるし。

…これはゲームが進行し始めたと思ってるいいのか…？

と一人思案していると、どんどん目の前の会話がヒートしていった。

「へえー？ユリリン、いつちよ前に口答えするようになったんだあー？」

「…なっ…！…ゆ、ユリリンは即刻止めると云ったはずだろう！そして今は貴様より地位が上だ…！」

「ふうーん…？」

ラトリークのからかい気味な言葉に、苦しみながらも反発するユリエル。そんなユリエルが気に食わなかったのか、ニコニコとした笑顔の中に若干（…いや結構）黒い笑みを浮かべながらユリエルを見る。

「…な、何だ…？」

「フフ…いやあ〜？苦し紛れなユリリンも可愛いなあーと思って」

「…は…？」

「そうやって、困ってる姿もそそるなあ〜」

「…！！！！…な、何を…！」

甘い猫なで声でユリエルに擦り寄りながら（しかししゃっぱり黒笑みで）そう言うラトリークに、ユリエルはゆでダコみたいに顔を真

っ赤にさせる。今にも湯気が出そうだ。

「アハハっ こんな言葉責めで顔真っ赤にさせちゃってー ユリリンはほんと、かーわーいーいーなあ〜」

つんつと指でユリエルの鼻を押す。そこでユリエルはからかわれたのが分かったのか、羞恥でもっと顔を赤くし、ぶるぶると震え出した。

「…ツツ！！…貴様ツ！！！」

「はい。そこまで」

そこで、今さっきまでラトリークに対して怒り心頭させていたキルノデイが二人の仲裁に入った。

「君達は何のために我が君を訪ねたのですか？…まさか当初の目的を忘れた訳じゃないですね？」

「わ、私は…！」

「忘れる訳ないよーん 僕、記憶力と人体実験だけが取り柄だからネ〜」

キルノデイの言葉に慌てるユリエルに対して、ラトリークは先程と変わらないニコニコ笑顔でそう答えた。

…こいつには緊張感っていうのがないのか…？

ちょっと疑問に思ってしまう。

「我々が我が君を訪ねた理由は、我が君の体調についてです」

「オレの体調？…つつても、どこも悪くないけど？」

「いえ。我が君を喚ぶため召喚魔術を遣ったのです。その遣われて喚ばわれた方に被害がないとは限らないのです」

「…ん？使われて呼ばれた奴が…え？ナニ？」

難しいことは分からない。…というか、こいつの言い回しが悪いのか。

混乱したオレを見兼ねたのが、ウォルトが丁寧に分かりやすく説明を加えてくれた。

「つまり、カイト様を喚ぶために遣われた魔術は実行するにはとても難しく、魔術を遣った方も、魔術を遣われた方も内側の魔力を大きく消耗するので、団長達はカイト様の体内に異常がないか調べにいらっしやっただのです」

「へー…」

長いっ！…けど分かった。

つまり、オレの健康診断に来たわけだ。オレの内側の魔力が…
……つつて…！

「魔力なんてあるはずねーだろツツ！！！！！」

生まれてこの方そんなファンシーなもの使ったことねーよ！
小さい頃は、あつたらいいなーなんて子供ながら思っちゃった
りしたけどッ！

そもそもこの電波時代、機械科学が進歩している中、そんな非科
学的な事信じれるはずないし！

あるわけがねえー！！！！

「有りますよ。というか、有ってなければ困ります」

「……………はっ！？」

そんなオレのマシガンツッコミ(心の中で)をよそに、冷静に
言ってくるのは不気味さがさつきより際立って見えるキルノデイだ。

… オレの理解力の無さの所為か…？

「そもそも、召喚魔術とは行術者と受術者双方の魔力を遣うのです。
受術者に魔力が無ければ成立いたしません」

「じゅじゅつしゃ…？じゅじゅつしゃ…？」

「行術者とは魔術を遣った我々の事、受術者とは魔術を遣われた者
…つまりカイト様の事です」

「オレがじゅじゅつしゃってやつなのか…？」

「はい。そうです」

「ちなみに、行つに魔術の術、者で行術者でー、受けるに魔術の術、
者で受術者だよー？」

分かってるー？って、ラトリークに言われた。

…わ、分かってるっつーの…っ！

「ん…で、それには魔力が必要だと…？」

「おっしやる通りです。我が君。無ければ魔術は遣えない。ならば我が君もこの場にはおられないのです」

軽く衝撃を受けた。オレに魔力なんて…っって、ゲームだから別に変じゃねーけどな。…だとしたら、どっただけ設定凝ってるんだ。空地兄さん…。

兄さんのオタクさに呆れながらも、渋々その設定を受け入れる。

姫とイケメン（美男美女）とDMと魔術&魔力かぁー…。

どんなやねん。

まあ、そんなツツコミは置いといて、取り敢えずオレは検査を受ける事になったんだけど…。

「…………お前が検査するのか…？」

「ウン〜 モチロンだよー！僕はお医者さん兼任してるからネ〜」

「兼任…？」

「ウン。本職は魔力研究者だよん」
「本職が研究者で医者は兼任なのか…？」

なんか違うくないか？

…というか、そんな奴に任せていいのか…さっき取り柄が人体実験とか言ってたしな…！やっぱ危ねーよ、こいつ。

「そっだよ」

「違うぞ。この変態がっ！研究はただのお前の趣味だろう！」

「えー？」

「えー、ではありません。ユリエルの言う通り、貴方の本職は宮廷医者でしょう。仕事と私用を一緒にしないで下さい」

ユリエルの毒舌とキルノデイの冷静なツツコミが炸裂する。

それにしてもユリエル、ラトリークに対しての対応が酷いな。

「一緒にしてないよー。ただ研究の方が熱心にやってるだけ…」

「それがいけないのです。宮廷に仕える身なら、きちんと職務を果たして頂かなければ困るのです」

「…なんだよーキルキルウ…王様のお付きみたいな言い方してエ…」
「…ファルガー様の事ですか？あの方は優秀な方じゃないですか。」

国王の護相談役として国事の職務を全うされ、忙しい身なのに貴方の監察係にもなっていて…まさか、また迷惑な事をやらかしたのですか…？」

「えー？違うよー。ちょこつとだけファルガーモルモットに実験台になってもらっただけでーちょこつと、魔力を弄っただけだよー」

「…！また貴方は…！」

「アハハー 大丈夫、大丈夫ー ちゃんと、魔術遣えるくらいに戻

しておいたしー …… (ボソツ) どんな事になるかは遣つてのお楽しみだけど」

最後らへんに変な事言つたぞ。こいつ。… 幸いキルノデイには聞こえなかつたみたいだけど…。

「…ファルガー様に迷惑を掛けてはいけませんよ。私用の研究等もファルガー様のご厚意で見逃してくれていらつしやるのですから」
「はいはい 分かつてるますよーん」

「…本当に分かつてるのですか…？」

はあー…とため息を吐きながら脱力顔になるキルノデイ。

全然話の見えないオレは、ただただ、その応酬を見守るしかなかつた。

「ご兩人。カイト様の検診を始めた方が宜しいかと」

そこで、助け船を出してくれたのはオレの護衛らしいウォルトだった。

その言葉に思い出したようにラトリークとの応酬を止めたキルノデイがこちらを振り返る。

「ああ、そうでした。… 申し訳ありません、我が君。只今行いますので少々お待ちを。… ワナロール医師、ご準備を」

「ラリィー！… むー分かつたよー。可愛い子ちゃんを待たせるのはイケナイからねー」

(…可愛い子ちゃん…)

その言い方に不満はあったが、話を進ませるためにそこは敢えてスルーした。

「じゃ、じゃ、ちゃっちゃんとやっちょあー！…ロンちゃあーん！」

ラトリークが妙なハイテンションで誰かを呼んだ。現われたのは…

「はい。博士」

「っうわあッ！…！」

つび、ビツクリした…！

背後からいきなり声があった。バツと振り返るとそこには、顔に触れるか触れないかの位置に美少女の顔があった。

もうオレにしたらお馴染みの整った顔立ち。まだ幼いその顔に似合わず、無感情的な表情は仮面の様にならない。

曇り空の様な灰色の瞳にクリーム色のおかつば髪。

吸い込まれていきそうな大きな瞳に自分が映されているのを見ながら、あー、間抜け顔だな…と呑気に思っているオレ。

「あっ…！じゃなくて！ちっ、近い！近いよ！」

と、現実に戻って慌てて引き離す。

「こ、今度は誰っ…！」

「すみません。間違えました」

間違え…???

彼女の言葉に目を点にしていると、ラトリークがすっとなきょうな声をあげた。

「あれれー？ロンちゃん？ラリィー博士はこっちだよん？…まさか、またメガネ忘れたのー？」

ひらひらーと手をその子に振る。美少女は無表情は変えず、申し訳なさそうな口調で謝った。

「すみません。博士。忘れました」

「もー、ダメだなあーロンちゃんは。いいよ。僕のメガネ貸してあげる」

ハイ。と言って出したのはラトリークが今付けている片眼鏡じゃなくて、レンズが2つ付いてある、割りと普通の銀縁フレームの眼鏡だった。

…そうか。目が悪かったのか。

…でも、何か意外だ。もうちょっと奇抜な眼鏡を出すかと思ったのに。

美少女は申し訳なさそうな、しかし憂いも含んだ口調でラトリークにお礼を言う。

「すみません。ありがとうございます。博士」

「いいよー あ、掛けてあげるー」

そう言って丁寧に眼鏡を掛けてやる姿は、何だか恋人同士のよう
な、親子の様な…温かいものを感じた。

両方美形だしなー…。絵面が合ってる。

「…すみません。ありがとうございます…博士」

「イエイエ、どーいたしまして」

微笑ましいなあー。何て思って頬を緩めながら眺めていると、く
るりつとラトリークがこちらを向いた。

「じゃあ、キャストは集まった事だし…検診始めましょーカ」

そう言って、ニンマリと…笑った。

『じゃあ、キャストは集まった事だし…検診始めましょーカ』

ラトリークがそう言って、オレ達は場所を変えた。何か検診の為には他の場所で用意してあるモノが必要らしい。

でかい扉を開けて部屋の外に出てみると、真っ直線に端の見えない回廊が続いていた。

そのことにもビックリしたが、もっと驚いたことは豪華な大部屋と同じように廊下もゴージャスだということだ。

て、天井高えー！めっちゃくちゃ明るっ！ここは真っ昼間の野外かっつーの！

…まあ、それくらい装飾が凄いのだ。さすが城だな。凝ってる。

オレ達一団はそんな豪華で長い廊下をとぼとぼと徒歩で歩いている。

…こんなんじゃ日が暮れるんじゃね？…今が何時か知らねーけど。

暇なので、そんなたわいもない事を考えてみる。

そういえば、ここ（ゲーム）の時間は現実にも反映するのかな？…だとしたら今どれくらい経ってんだろ…2、3時間くらいかな…？あんま経ってないと思うけど…。

「カイト様。お止まり下さい」

「…へ？もう着いたの？」

「はい。ここが…」

「ここが僕さまのラボの入り口だよー」

「バぁーン！…と宣言するラトリーク。

「ここ…？」

そこは長い廊下の途中。まだ廊下の先は見えないし、さっきと変わらない廊下が続いている。

「…って言っても、何にも無いぜ？どこに入り口が…」

「え？あるじゃない。ここにー…」

ラトリークが何の変哲もない白い壁に手をかざして…

「えっ…！？」

ズツと勢い良く手を壁に突っ込んだ。壁に手、手首、腕が肘まで入ったところでラトリークが振り返って言った。

「ね？ここが入り口ー」

笑顔で言いながらズブズブと入っていく。

…何か気持ち悪いな…。…これもお得意の魔術ってやつ？

身体が半分入ったところでもう一回笑いかけながらにこやかに、

「皆も続いて入ってきてねー」

「わっ、分かったから早く入ってくれっ！…見てて気持ち悪いからっ！」

「何だよー子猫ちゃんのイケずうー」

そりゃな！半身、しかも縦割りで半分の間人が笑顔で喋ってたら気持ち悪いよっ！

こいつはデリカシーってもんが無いのか？…まあ、オレもねーけどわ…。

ブツブツ独り言を言っているとキルノディに急かされた。

「我が君。お先にどうぞ」

「あ…っ、うん…」

そう頷いて、指から慎重に壁に近づいてみる。

…やっぱり怖えーな。壁に入る経験なんてしてねーもん。緊張す…

「あ！そうそう。入ってきたらまず潔癖の魔術かけるからあ…って子猫ちゃん？ナニしてるの？」

「……………」

バックンバックンバックン… …びっ…

「っビックリするじゃねーかっ！いきなり出てきたらっ！し、しか

も……！」

……生首っ……！

唐突にラトリークの生首が壁から出てきて、オレは衝撃で尻餅をついたまま、ラトリークはそのままの姿で爽やかな笑顔をオレに向ける。

「ごめんゴメーン！気付かなかった」

気付かなかった　じゃねーよッ！首だけで謝られても気持ち悪いーただだよッ！そして誠意が全っ然無いッ！

「……はあ……やっぱりオレ、こいつよりデリカシーあるかも……」

「んー？何か言った？子猫ちゃん？」

「……別に？何も。」

*

「……ふおー……広っ……！」

さっきより慎重に壁を通り抜けたオレが一番初めに見たのは、全体が灰色のでかい大部屋だった。

…さつき居た部屋よりでかいんじゃないか？って思っくらの広々とした場所だった。

一面が灰色という無機質な感じで、まるで異世界にでも来た気分だ。

「子猫ちゃん！こっちだよー」

そう言って手でおいでおいでをされながら、灰色の大部屋の端にあつた扉の前まで連れていかれる。

「まずはー潔癖の魔術、かけないとねー」

「？」

『第五章、清浄の詞・潔癖魔術…』

そう唱えたラトリークの指先から、緑色のような青色のような淡い光が発した。それをオレに軽く振るようにかける。

すると、その光が全身を駆け巡る様に透っていき、最後はふわっと消えていった。

「？…何…？」

「魔術をかけたんだよー 身体をキレイにする魔術 …あ！別に子猫ちゃんが汚い訳じゃないんだよ？ただ、研究所だから清潔にしておかないといけなだけ！」

「そ、そう…」

別に汚くても気にしなかったんだけど…医療するところなんだから仕方ないか。

そう思っただけで何気なく後ろを振り返ってみると、他の4人も個々に自分で魔術をかけたようで、扉が開くのを待っていた。

オレは4人がどんな魔術を使うのか興味があったのだが、諦めてラトリークが扉を開けるのを待つ。

「ではでは、どうぞー」

キィー…と無機質な扉を開くと、目に飛び込んできたのは黄色と赤の斑の部屋だった。

「僕さまのラボへいらっしやーい」

「っど…!?!」

「…やれやれ…全く、相変わらず趣味が悪いですね…貴方は」

先ほどの無機質な部屋とのあまりにもギャップに驚きを隠せないオレと対象に、嫌悪感を隠せないキルノデイが呆れたように呟いた。

「ヒドいなーキルキルはあー。これが今の魔術界でのトレンドなんだよー」

「どこがですか。こんな悪趣味なものが…有り得ませんね」

「そうだぞ。冗談は貴様の存在だけにしろ!」

「…ユリリンひどっ…」

ラトリークがちよつと大袈裟にシヨックを受けたような身振りをする。そこに先ほどの美少女が近づいてきてラトリークを慰めるように肩に手を置いた。

「すみません。ラリィー博士……」

「……うん……？」

「……がんばっ……！」

「……うっ、うわああああん！！！！ロンちゃああああん！！！！」

ぎゅーっ！！っ和美少女を抱き締めて大泣きする情けない大人の図が出来た。

「……ええつと……検診は……？」

「ああ……再度申し訳ありません。我が君……ワナロール医師」
「……うッ……ぐすつ……うん……分かってるよ。やるよー……」

ベソをかきながら少々怒気の入ったキルノデイの言葉に従う情けない大人……じゃなくてラトリーク。

「……はいはい 子猫ちゃんはここに座ってー？」

「え……あ、う、うん……」

さつきまでとは打って変わり、何事もなかったようにニンマリ笑顔で部屋の中央にあった椅子を勧める。

いよいよ検査されるのかと思うと何だか緊張してきた。

…オレ、病気とかなんなかったから検診とか無縁だったんだよな
…。

「そんなに力まないでー？肩の力抜いてねー？」

「お、おう…。…よろしく…。？」

緊張してたのはバレバレだったようで、そう諭された。一応よろしく頼んだ。

そーいえば検診か検査か知らねーけど、するには小難しい機械を使うんだったよな…。確か、DCC機械とかADM機械とかいう医療機具って習ったな…。初めてだからちよつと見てみるの楽しみかも。

そんな密かに楽しみにしている海斗を余所に、着々と準備を進めていくラトリークとその助手らしき美少女。

ふと見てみると何故か床に、始めにいた薄暗い部屋にあったような幾何学的な模様を描いていた。何だろうと思っただが、まあいいか、と思いい機具が出てくるのを心待ちにしていた。

しかし、二人が準備しているモノに医療機具等といった物は存在しなかった。

「さー準備が整いましたよー リラックスしてー」

「…？…準備整ったって…医療機具は…？」

「？医療キグ？」

「あ、いや…。…！…！」

そこで重大な事に気が付いた。

…そ、そうだ…！ここは…ファンタジーの世界だった…！！

「ああー！！！！！！」

『！！！？』

機械なんてあるわけないじゃん！

あの空地兄さんがそこらへん見落とす訳ないじゃないか…！！

「…だ、だとしたら…」

オレ…どんな検査受けさせられるの…？

「……………」

「…ど、どうしましたか…？我が君…。いきなり叫ばられて…」

「…どうしたもこうしたもねーよ…。…質問があるんだけど」

「何でしょう？」

「…一体オレを何で検査するわけ…？」

「それは…」

「そんなの魔術に決まってるじゃーん」

ニコニコー とラトリークが当然の様にそう言った。

「ま…魔術うー！！！？」

「うん 当たり前じゃない？だってここは魔術世界だしー」
「…魔術…世界…」

「うん て、ことで検診始めまシヨ」
「えっ！！？」

「それでは我が君、私達は外で待っていますゆえ」

「大丈夫ですよ！姫。奴は変態ですが、魔術医療に関しては出来る奴ですから」

「…カイト様…御武運を…」

そう言っ出ていく三名方。

「え…いやいや！何か最後の怖いぞ！ウォルト！しかもまだ全然理解…」

「ロンちゃん！」

「すみません。失礼します」と言っ美少女がラトリークの合図と共にオレの手足を椅子に固定した。

「な…何で椅子に金属ベルトが…」

「アハ。まあ、色々暴れ回っちゃうモルモツ…研究協力者がいるからさ」

「…言い直した意味あるの？」

…はっ！じゃなくて！何だこの状況！絶体絶命の大ピンチじゃないか！！？

「オレを縛っどうすんだよ！！？ただの検査だろっ！？」

「うん。すぐ終わるカラゝガマンしててネ？」

「…本当にただの検査なんだろうなっ!?!?!」

めちゃくちゃ不安だ!

「すみません、ラリイ博士。術式開始します」

その言葉と共に美少女の口から紡がれる美声の暗号みたいな言葉達。

その呪文に反応するかのようになり、床に描かれていた幾何学的な模様が輝きだした。

『生まれ詞、不死鳥の翼を持ち真実を示す眼よ』

『朽ちれ詞、澄んだ妖精の精神を宿す光の炎よ』

美少女の声とリンクしてラトリークの声が響く。それは先ほどと同じ人物とは想像出来ない、美しい声音をしていた。

『さあ、僕に視せておくれ。…第二十章真実詞、鳥眼魔術』

最後にそう呟いた瞬間、模様の光と共に身体の中が熱くなっていた。まるで何か熱い物が身体の中を駆け巡っている様な感覚。

…診られてる…。

瞬間的にそう思ったオレだが、手足を固定され、抵抗という抵抗が出来ない。

手のひらにじっとりと汗が噴き出していた。頭の中がぼんやりし

てきて、何も考えられなくなった。

そうやってボーっとしているといつの間にか検査は終わっていたみたいで模様の光は収まり、部屋は元の趣味の悪い奇抜な部屋に戻っていた。

「フフフー お疲れさまー もう終わったよー」

「…あ…あ…」

「すみません。お疲れ様でした」

そう言って手足を固定していた金属ベルトを外してくれる美少女。そんな情景をまだ正常に働かない頭で見ている。

その手が腰のベルトまで来たところで覚醒して、慌てて制した。

「あ…いいよ。自分でやるし…女の子にこんな事やらせるのはね…」

「…すみません…」

「いや！そんなそつちが謝る事じゃ…」

「すみません。違います」

「だから謝る…っつて、違う？…何が？」

「私は…」

「ロンちゃんは男の子だよー？」

美少女の無感情な声に、のほほん、とした声が重なった。もちろんのほほん声の持ち主はラトリークでさっきまでボーっとしていたオレでも分かる。

分かる……が…！

「お…と…こ……？」

バタバタバタ…

バァーンツッ！！！！

「大丈夫か！？カイト様っ…！？」

勢いよくこちらも奇抜なデザインの扉を開けたのは、いつもはクールなウォルトだ。

急いで来たのか、少し息が荒い。焦ってタメ口を聞いてしまうほどだ。

ウォルトは扉から3メートル位先に椅子に座って口をパクパクと開閉している主人を発見する。

直ぐ近くに近づいてみると、その呆然とした表情には純粹な驚きと、微かなおののきが感じられた。

「っ…………カイト様！？大丈夫ですか！？…………まさか、この変態に卑猥なことでもされて…！？」

「アハハ― ヒドイな―護衛くんはッ 僕は何もしてないのにイ」

「っ！！お前には訊いていない！！俺はカイト様に…」

「…………お…………」

「カイト様っ！？…今何と…？」

「……………」

「…え？」

「……………オト…」

「は？」

間抜けな声を出したウォルトにも構わず、疑問気に呟く海斗。

「え、男…？や、そんな…だって…どう見たって…」

「…か、カイト様…？」

「ないないないって！だってこんな美少女が…」

「……………」

ウォルトは少々壊れ気味の主人を横目に、先程の事で用心として腰に差していた剣をスラリと抜く。

「…変態…お前は絶対に許さぬっ…！！！！」

「えっ！？何で僕！？」

抜いた剣をラトリークに突き立てる。そんなウォルトに驚いて少し身を退く。

「お前の所為だろうっ！カイト様がこんなことになったのは…！」

「僕サマ何もしてないヨ！ただ検査しただけ…」

すると唐突にウォルトはカッと目を見開く。

「は！まさか検査と見せかけて、カイト様に何か変な事でも…！？」

「シテない！シテないよォー！子猫ちゃんは今、現実と空想との狭間で戦ってるだけダヨォー！」

その言葉にキラリとウォルトの目が光る。

「現実と空想…？…よもやお前…夢視の魔術でも…！？」

「だーかーらー！違っつてエー！」

必死に否定するラトリークに聞き耳を持たないといった風貌でウォルトが叫ぶ。

「もう耐えられんっ！お前はこの手で排除してくれるっ！」

「えエー！ー！そんな横暴なっ…！」

知らんっ！と言つてラトリークに勢い良く斬り掛かっていくウォルト。

そんなウォルトの剣をギリギリの間合いで確実に避けるラトリーク。

「わっ…あツと…っ…や、やめっ…！」

「うるちよるするなっ！この変態眼鏡がっ！」

「ひっ…ヒドっ…っ…！」

一文の隙間の無い攻防。逃げ回るラトリークに剣を振り回し、追いついてるウォルト。

と、そこに、ウォルトに遅れてキルノディとユリエルが現れた。

「お、お前達…一体何をやっているんだ？」

「あ！キルキルうー！…った、助けっ…てッ…！」

「何を？」

「見て分かるデシヨっ…！僕っ…サマをッ…！ダヨっ…！」

剣筋を必死に避けながら訴える。

「フンツ！貴様など、塵になつてしまえばいい…！」

「ユリリン！？…何で…おっと！…そんなにつ…僕に冷たいっ…んだアっ…！」

そう言われたユリエルが不意に顔を下に向けた。それによって表情が見えなくなった。

「…冷たい訳じゃない…」

「……え…？」

ウォルト
鬼に追い掛けられながらも、驚いてユリエルの方へ目を向ける。そして、ユリエルは意を決したようにキリツと顔をあげて、とても冷静な声で…。

「冷たい訳じゃない…貴様が大嫌いなだけだッ！」

…そう断言した。

「そ…それはナイよっ！ユリリン！！！」

最後にそう叫んで、ドバアっ！とつめき声を上げて倒れたのは…言うまでもない。

「ふう……やっと当たったか」

「ウォルト…貴方は…」

「自業自得ですよ。团长」

「ユリエル…貴方達は…」

一仕事して満足気なウォルトとラトリークがやられて嬉しそうに言うユリエルを見て、ハア…と溜め息を吐き、額に手を当てる苦勞

人なキルノデイ。

「とにかく、一体この短時間に何があったのですか？」

「…この変態が、カイト様に変な事をしたんだ」

「変な事…？」

怪訝そうにウォルトを振りかぶる。

「ああ、お陰でカイト様の様子が可笑しくなった。…男がどうか、美少女がどうか…」

「男…美少女…」

そう呟いてチラリと奇抜な部屋に一人突っ立っているラトリークの助手、ロンを見る。

そしてそのロンを呆然とした表情で見ている海斗を見る。

「…そういう事ですか…」

納得顔で頷くキルノデイを見ながら腑に落ちない様子のウォルト。

「そういう事とは？」

「…我が君はきつと、ワナロール医師の助手…ロンを女性と誤っていたのでしょう」

「…だから？」

「…ですから、ロンは男性です」

男性…と聞いても表情は変わらず、怪訝そうな顔付きのウォルト。

「？…それは初めから分かっていたが…？」

「！…知っていたのですか」

「？見れば分かるだろう？」

ウォルトの言葉に驚き、確認する。当たり前のように話すウォルトに嘘を吐いているようには思えない。

「…通常の方はただ見ただけでは分かりませんが…まあ、流石入団テストをトップで抜けた力量ですね…」

「？」

「…いえ、こちらの話です。…話を戻しますが、ロンは男性です。なので初めからロンの事を女性と誤っていた我が君が、ロンが男性だと知って驚かれたのでしょうか」

「…驚かれた…？それだけでか？」

少し呆れ気味な声が出た。

「そうです。我が君は純粋なのですよ。ああ…御可哀相な我が君…」

「………そうか…」

上着の中から出した赤い布でオイオイと泣いて目元を押さえるキルノデイから一歩身を退いてそう応える。心なし、無表情な顔が気味の悪いモノでも見たかのように引きつっているように感じる。

*

「ワナロル医師。起きて下さい。検査結果を…」

「…うん…ハニヤ…僕サマは一体…？」
「寝呆けないで下さい。いいですから早く我が君の検査結果を教えてください下さい」

軽症の打撲で気絶していたラトリークが目を擦りながら身体を起こした。

そんなラトリークを急かすようにキルノディが再度検査結果を問う。

「シー…あ、子猫ちゃんの検査結果ネ〜。ウン、分かってるヨー」

ニヤハハー、と笑いながら少し壊れ気味のラトリーク。

その近くで、ずっと放心している海斗は足元から感じるモゾモゾとした感覚に意識を戻した。

「…ん…？」

モゾモゾ感足から腰らへんにきて、胴から胸へそして肩まできた。

「…な…！？」

何…と呟いて自身の肩を見る。するとそこには、何かモコモコとした白い物体が乗っかっていた。

「モンモンーモモモ！」

「えっ…！？」

驚いた事に、モコモコの物体がいきなり喋った…というか鳴いた。

「モモ！モモンモン！」

「も…？へ…何…この物体…」

突然現れた謎の物体に狼狽えているオレの肩に乗っている謎の生命体を見て、目を見開くキルノデイ。

「それは…モンモンじゃないですか」

「も、モンモン…？」

そのまんまじゃねーか。

というツツコミは置いといて、驚いたように呟いたキルノデイが説明してくれる。

「はい。モンモンとは南部の地域に生息している小型魔獣で、とても希少な魔獣なんです。しかしその俊敏な動きと記憶魔術が遣える能力で、主に伝言や偵察魔獣と活用されています」

「へえー」

そんな珍しい物体…いや、生物なのか。

感心しているオレを余所に、怪訝な顔でオレの肩にいるモンモンを凝視する。

「…しかし、モンモンは飼われた主人に忠実で他人には早々懐かないのですが…流石我が君。魔獣をも手懐けるお姿…感銘を受けます…！」

「…え？…あ、いや…そんな事言われても…」

このモコモコが魔獣って…。魔獣ってのはもっところ『ガールル…』とか言っておつきくて怖い生物を思い浮かべてたけど…：案外可愛らしい生物だった。

オレは昔から動物には好かれる質の奴だから、こんな可愛いものを手懐けるとか言われても困るだけだ。

少しだけ手をモンモンに近付けてモコモコに触ってみると、案の定ふわふわモコモコしていて触り心地がよかった。

すると、オレに触られて反応したのか、ふるふる、とモコモコを揺らした瞬間、ぴよこっ、とモコモコから長い耳のような物が出てきた。

続けて頭、可愛らしいクリクリの瞳、小さな鼻と口が出てき、胴体が出てきた。胴には小さな手足が四本付いており、最初にモコモコとした物体と思っていたのは、モンモンの身体より大きな尻尾だった。

そのふわふわな尻尾を左右に振りながら、オレの手に身体をすり付けてくる。その感触がくすぐったくて、

「あはは…止めるよ。くすぐりたい」

「モンモン、モモ」

「止めるって…ははっ」

そんな一人と一匹の和やかな光景で、周りが穏やかな空気になっているのは露知らない海斗は、モンモンの目が黄色に光っているのに気付いた。

「あれ…？こいつの目、黄色に光ってないか…？」

海斗のその言葉に穏やかな表情になっていたキルノデイがハツ！と表情を元に戻す。

「我が君、恐れながらそれは伝言を預かっている証拠です。…少々宜しいでしょうか？」

そう言ってモンモンに掌を近づける。

『我はキルノデイ。その言伝を示せ』

不思議な音声で何やら言葉を唱え、キルノデイの掌から出た灰色の光がモンモンに当たる。

《ワレ、承認シタ》

そんな機械的な音声がモンモンから聞こえ、次の瞬間モンモンの大きな目が真っ黄色になり、目から黄色い光が出た。

『…ご連絡いたします』

「！？…ほ…」

ホログラム…！？

モンモンの目から出た黄色い光に人が映っていた…立体的に。それはどう見ても、電波社会で見慣れたホログラムで…。

どうして。という疑問があったが、光の中の…よく見れば先ほどから懐かしいマントマンだったが…人物が話を続ける。

『先程陛下からのご通告がありました、姫様のお姿を拝見されたいとの事。至急お広場にお集まり下さい』

『ご連絡は以上です』と言って映像が途切れ、モンモンの目から発されていた光も消えた。

「…これは…陛下もせつかちな方だ…」

そう言つて、光が消えて元の色だろう灰色の瞳に戻ったモンモンを見て、諦め顔で呟くキルノデイだった。

「さて…陛下からのご通告となれば、忙しくなりますよ」

「陛下…？つか、今の何！？…ホログラム…だよね？」

「ほろぐらむ…？…ああ、今の記憶魔術の事ですか？」

「あ、えっと…そ、そう。それ！記憶魔術！…何それ？」

「記憶魔術とはある特定の声、人物、風景などを記憶し、特定の相手…つまり先程では私達にその記憶を伝える事が出来るのです」

「へえ…ここにもそんな便利なもんが…」

「？」

「あ、いや…えっと、じゃあこいつは？」

そう言つて今もまだ肩に乗っているモンモンを示す。

「ああ…モンモンは記憶魔術を行うにあたっての媒体…ということですね。簡単に云うと、特定の記憶を記憶させておく特別な器です。しかしそれは何でもいと云う訳ではなく、同じ記憶魔術が遣えるモノか、同等の魔力を持っている器でしか出来ないのです」

「…だから、記憶魔術が遣えるモンモンが器には適切…とか？」

「仰る通りです。我が君」

ふむ…大体は分かったけど…つまりモンモンが記憶するデータファイルで、記憶魔術つてのが録画技術…てどこか…。

…しかし、この不気味なキルノディから『モンモン』なんて可愛

らしい言葉が出るなんて……ププツ……に、似合わねー！

「……ッ……」

「……どうか致しましたか？我が君？」

「……い、いやぁ……何でもねー……」

笑い堪えるの必死……！話し掛けんな！

そう思っただけを堪えていると、不思議そうな顔をしたキルノデ
イだが思い出した様に顔を上げて、

……パチンツ……

部屋中に響くように指を鳴らした。

「は。……御用でしょうか。団長様」

「陛下とのご面談があるので、我が君のお手伝いを宜しく頼む。
……あ、ユリエルも」

「了解致しました」

「分かりました」

キルノディの指パッチンと共に突然現れたマントマンとユリエル
が、キルノディの言葉に従うようにオレを連行する。

「へ…？あ、何？」

「姫様。大変申し訳ありませんが、御支度がありますので部屋を御移りになりましょう」

「我が姫君様、どうぞこちらへ」

「え、いや、…支度って…？」

ユリエルが女性にしては長身なのは分かっていたけど、近づいてみるとこのマントマンもオレより遙かにデカかった。

両脇に長身二人がオレを挟むように並ぶから、何だか居心地が悪い。

しかも何の支度をするのか分からないまま連行するので、オレの頭の中はハテナ（？）マークで一杯だ。

「それは陛下に会うための御支度でございます」

マントマンがサラリと答えた。

「へ…陛下って…まさか…」

「はい、姫君様。我が国、ビシエリク国の王様にございます」

「姫様。沢山可愛く致しましょうね」

語尾に が付きそうにそう言うユリエルと、淡々と仕事をこなそつと歩き出すマントマン。

オレはそんな二人に両脇を抱えられながら絶句する。

「お、おお……」

ああ……どうしてだろう……

「王様ああああ!!?!?!?!」

ここに来てから叫び過ぎだな。オレ。

そんな事を頭の端の思い浮かべては……

……消えた。

真実の中で（前書き）

注意・

微工口有り

苦手な方は
お気を付けを。

真実の中で

*

「さあ、ご説明を」

「んー、それはイインだけど…子猫ちゃん、大丈夫なの？」

「…大丈夫だと思いますよ。我が君は逞しい方ですから」

「そうじゃなくて…」

「前置きはその位にして、検査結果を」

「…フー…ハイハイ。分かったよ。ホイじゃ、子猫ちゃんの検査結果だけ…」

諦めたようにため息を吐き、海斗の検査結果を言おうと口を開く
宮廷医師、ラトリーク。

「…異常無し」

開いた口から出たのはその言葉。思わず耳を疑う。

「…それは冗談でなく…？」

「僕サマは検査結果を偽るような事はシマセン」

「…そうですね…そうでしたね。…だとすると、これは…」

言葉を濁してしまう。それ程にまでに信じ堅い真実だった。

「ウン。あんだけの高等魔術を受けといて…全く異常無しだということ…ちよつとオカシイかな」

「異次元からの召喚術が成功したのは奇跡に近いのですから、まだ解明されていないことが沢山あります。結論つけるのは早いかと」

「そーだけど、やっぱりオカシイでしょ。だって、あの第七章説目だヨ？しかも囚われ詞の魔術…どこも異常無い所が異常だよ」

「…確かに、不可解な点ですね。…あれはこちらで30人の魔術師達を遣つてやつと出来た魔術…あの膨大な魔力を受けとめられたとは…」

少し同意すると、話に乗ったのが嬉しいように相打ちを打つラトリーク。

「デシヨ？異常が無い事がオカシイ…ああ、あの子の中はどうなっているんだロ…解剖シタイ…」

「駄目です」

うつとりとした表情になるラトリークは即答で制止の言葉をピシヤリと言われる。

「…ちえー。ツレないなアー」

「…全く…貴方の変態加減には呆れますよ」

いじけた様子になったのを見計らって、呆れ声を出す。しかし当のラトリークは、

「ふーんだ。誉め言葉として受け取るヨーダ！」

べーっと舌を出して開き直った。

「…ア、そうそう。もう一個だけ発見があったよ」

「…発見？」

「ウン。子猫ちゃん…あの子の中から…」

…《紅の鍵》の反応が無い」

「…!？」

無表情になって淡々と答えるラトリーク。その発言に部屋の中が

一気に冷たくなる。

「…それは…」

「ウン。大問題だね…あの子の中を視た時…まさかとは思ったケド…確かに《紅の鍵》の反応は無かった」

海斗に魔力の異常が無いと聞いたときよりも遥かに驚いた。冷静を保とうと努力はしたが、出来ず焦って口を開く。

「これは…陛下にご報告を…」

「それはダメだよ。こんな事知られたら他国がどんな事してくるか…あまり他言しない方が利口だよ」

片眼鏡の奥底から、キラリと目が光る。

確かに、これは非常に信じられない危険な事実だ。これを陛下に報告して、もしも外に広まったら…そう考えると、私達が、いや、この国全体が危うくなってしまう。

そこまで考えて納得し、ラトリークの言葉に同意する。

「…そうですね…では、この事は他言無用で」

この時ちゃんと釘も刺しておく。

するとその返事を聞いたラトリークは不思議に顔を緩ませた。

「そうだね。…フッフ…君との秘密がまた出来たネ」

「…気持ち悪い事言わないで下さい。ワナロル医師」

…冗談は止してくれ。

「ラリィーって呼んでって言ってるデシヨ」

「呼びません。…さて、私も陛下から召集されているので、これで

ラトリークの絡みをスルリと避けて、出口に足を向ける。

「あ、待って…」

すると食い下がってきたラトリークが腕を掴んできて…

…チュ…。

掴んだ腕を引いて、唇に触れるだけのキスをしてきた。

思わず相手を押し退ける。

「……ッ…何を…」

「フフ せっかく検査して魔力遣ったんだから…僕サマに」
「褒美…」

「…貴方って人は…」

「シー？早く行かないとイケないんじゃないのー？…それとも、もつとしてもイイの？」

甘い、猫なで声で囁いてくるラトリーク。

そんな声に一瞬クラツときたが、瞬時に精神を落ち着かせる。

「…しませんし、させません。もう行きます」

「フフ…かあわいイ」

少し赤くなってしまった顔を隠しながらそう言う。するとまた、ラトリークは近いてきて耳元で囁く。

「気を付けてネ？…あの子にも」

妖しい、危険な目付きでそう言った。

一瞬何を言っているのか分からなかったが、この人も我が君の事を心配しているのだろう、と解釈して考えて答える。

「…我が君は大丈夫ですよ。彼女…いえ、

…彼は運に恵まれていますからね」

そう答えたのは血の様な色をした不気味な男…キルノディは、愛しそつに嗤う。

その表情に、自分の言葉を勘違いされたラトリークは怒るが……一瞬だけ見惚れてしまった。

…だから気付かなかったのかもしいない。

甘い空間の中、ただ一人だけ彼らを見つめていた存在に。

どうして忘れてしまった？

「……今の話……どういふ事ですか……？」

…彼が居ることに…。

*

堕ちて去く。

運命とは残酷だ。

彼らは偶然出会ってしまった。

『魔力』と『電波』が交じりあう、不可解な場所^{ステージ}で。

そして彼らは……

……巻き込まれた。

この、運命という名の残酷な遊戯^{ゲーム}に。

真実の中で（後書き）

所で、ロンは何処へ行ったかというところ……

「すみません。……ずっと居ました」

甘い空間にも及ばず、
静かにずっと一緒の部屋に居たそうです。

では本文では何故『一人』という表現をしたかというところ……

……それはまた違ってお話で。

オレは今、ラトリークのラボから元居たデックカイ部屋に戻り、なんと女性二人にフリフリドレスを勧められていた。

…いや、強制されていた。

「それがイヤなんだよっ！そのドレスがっ！」

「どうしてですか？」

「何故ですか？」

二人の疑問の聲が被る。

その一人…ユリエルは長い睫毛、キリリとした瞳をパチパチさせて驚きながら、手元にあるフリフリドレスを大事そうに持っている。

一方、キルノデイが呼んで命令されていたマントマン…この人は大部屋に来た時にフードを外して顔を見せてくれた。フードを外した顔は、ユリエルには至らないが…外にオレの美人基準が狂っただけだが…普通よりは整った、可愛らしい顔をしていた。

(こんな子が学校に居たら…学校のマドンナ的存在になってそう)

そんな感じの子だ。

学校でこんな美人さん見たことなかったし…ユリエル達が美形過ぎるだけで、現実ではこういう子が普通にモテそうだよな…。

そういう事で(どういう事だ)、名前を強制的に教えて貰ったら『キャロル』という名前だという。

そんなマドンナ、キャロルがユリエルと共にドレスを強制してく

る。

「どうしてとか、何故とか言われても！オレはぜってえ着ねえからなっ！」

「……往生際の悪い姫ですね……では、」

スツ…とキャロルが何処からか出してきたのは真っ黒な縄。

「…え…？」

「逃げないで下さいね…？大丈夫。怖くないです…」

「は、はあああ！！？…なにしてっ…」

ニツコリ（腹黒）笑顔でニジリニジリと真っ黒い縄を両手で持ちながら近づいてくるキャロル。

（せ、性格変わってないか…！！！？）

オレは抵抗するが、女の子相手に暴力は振るえない…と手加減したのが裏目に出る。

「さあ、観念なさって私に縛られて下さいっ！」

「…目的違ってるからっ！」

見事にユリエルと八モった。

叫んだけどキャラルの行動は止まらず、強引に手首を縛られるところだ…

「わ、分かった…！それ着るから縛るのは止めてくれっ…！」

「……ちっ……そうですか。それは良かった」

オレの言葉を聞いて、ニッコリ笑ってオレから離れた。

(てか今舌打ちしたよねっ！？絶対したよねっ！？)

心の中で悲鳴をあげながら、安堵が顔に出る。

「では、姫様。このドレスを…」

「あ…ああ。…それとお願いがあるんだけど……一人で着替えられるから、二人共ちよっと外出してくれねえ？」

流石に美女二人に見られながら着替えは出来ない…と、なんともチキンなおれ。

二人は渋りながらも、再度お願いすると素直に部屋を出てくれる。

「では、着替えが終わりましたらお呼び下さいね」

そう言って、パタンっとデカイ扉を閉める。

「……ふうー… やつと一人になれた…」

あんなに濃い連中といつまでも居たら、身が持たない。

一人になれた安堵感と解放感でドサツ…とデカイキングサイズのベツトにダイブする。

「ふわふわ〜…」

思いもよらないフカフカナベツトに、気持ち良くてつい身を任せ
てしまう。

「モンモン〜」

すると和んでいたオレの背後から出てきたモコモコ…モンモンが、
フワリとオレの顔に擦り寄る。

「お前、ついてきてたのか。…ふふ…くすぐってーよ…」

「モンモンー」

モコモコの毛は当たるとくすぐったいが、それと同時にフワフワ
した感触が気持ち良い。

(このまま…目が覚めればいいのになあ…)

現実の世界を思って思考を巡らせる。

(今いつだろう…あれからだいぶ経つし…兄さん心配してないかな…)

掃除をしようと思って空地兄さんの部屋に行つて…こんなことになつたのだ。

(そういえば…ここがゲームの世界なら、生身のオレはまだ現実にあるんだよな…)

自室で倒れている弟を見た兄さんの事を考えると…。

(早く…早くこのゲームを終わらせなきゃ…)

そう思って決意を固め、フカフカベットから身を上げる。モンモンは唐突な行動についていけず、海斗を見上げる。

顔を上げた先には先ほどユリエル達が置いていったフリフリドレスが…。

「……あれ…着ねえとダメだよな……」

そう思つたらさっきの決意がどこかへいきそうな海斗だった。

*

そして…止む終えなくフリフリドレスを着たオレ。

これで分かっただろう？オレが女物のお姫様ドレスを着ている理由が…。

え？回想が長い？

そんな事するかっ！

この短時間で濃い事全開なんだぞっ！

こんだけで収めたオレを褒めてくれよっ…！

…本当に…疲れた…。

えっと、これで冒頭に戻る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2761t/>

男姫さまっ！ 花嫁修業日記

2011年8月16日16時43分発行